館長（かんちょう）のおすすめ

ゆらぎびと

館長のおすすめ

登場人物紹介
第１章 いくじなしのボブス
第２章 アリとキリギリスと、〇〇〇
第３章 レンガ職人のコスパ
第４章 伝説のゲーム
第５章 荷運びの馬
第６章 みんなのヒーロー ワガママン
第７章 算数：てこの問題
第８章 夢のかなえ方
第９章 幸せのありか
第１０章 かみさまからの贈り物

登場人物紹介

館長・・・タール村にある唯一の図書館の館長。

ゴシカ・・・図書館で働く司書。

スイスイ・・・近くの学校からよく図書館に遊びに来る女の子。

第1章　いくじなしのボブス

お百姓(ひゃくしょう)のボブス

あるところに、ボブスというお百姓がいました。
ボブスは働き者で、雨の日も風の日もせっせと畑を耕(たがや)しました。
ボブスは身体も小さく、弱かったので、良い百姓とは決して言えませんでしたが、真面目さであれば誰にも負けず、本当に長い時間、よく働きました。
その畑もボブスのものではなく、トルマンさんという大地主の土地で、それを耕して半分は自分のものにしてよくて、もう半分を土地を貸してくれたトルマンさんに渡すという約束で、働いていました。
ボブスには妻と小さい子どもたちがいました。子どもたちは可愛く、目に入れても痛くならない程でした。
妻もよくボブスを支え、貧しいながらも幸せな家庭を築いていました。
しかしその幸せな家庭にある困った出来事が起きました。

仕事か家か

子どもの一人が病気にかかってしまいました。そしてその病気が他の子どもにもうつり、妻一人では何人もの子どもの面倒を見るのが大変になってしまいました。

ボブスも妻と一緒に、子どもの看護をしてあげたかったのですが、ボブスには仕事があります。仕事をしないとお金は入ってきません。
ここでボブスは悩みました。家のこともしたいですが、仕事もしないと、そもそも家庭が成り立っていきません。
かといって、大地主のトルマンさんに相談する勇気もありません。もし相談して、しばらく休みたいなどと言ったら、もういいと言われ、畑を取り上げられてしまうかもしれません。
ボブスはくよくよと考え、しかし何もできないまま時間が過ぎてしまいました。

食いっぱぐれる

時間だけが過ぎていったある日、子どもたちの病状（びょうじょう）が変わらないので、街にある大きな病院にしばらくの間入院させることになりました。
妻一人では子どもたちを見切れないので、ボブスも一緒についていく必要があります。入院するので何週間は家を空けることになるでしょう。
ボブスはそのことをトルマンさんに言う必要があります。しばらく家を空けるので、仕事を休ませて欲しいと。しかしボブスは怖くてトルマンさんに言うことができません。
とうとうボブスは出発の前日に、観念（かんねん）してこのことをトルマンさんに話しました。

トルマンさんも、急にそんなこと言われても困ります。ボブスが働いてくれない分、畑は荒れ放題になり、農作物も収穫することができません。他の人にやってもらうにも、急に明日から人が用意できるわけでもありません。
結局トルマンさんはボブスが家を空けることを許してくれましたが、その後の畑の管理を大急ぎで決める必要があり、トルマンさんはぐったりしてしまうとともに、早くこのことを言ってくれなかったボブスを、憎らしくすら思うのでした。
幸い、子どもたちは入院の成果もあってか、元気になりました。そしてボブス一家は家に帰ってきたのですが、この一件があってからトルマンさんとの関係が悪くなり、とうとう畑を取り上げられてしまうことになりました。新しく、力の強い男性が代わりに畑を耕すのだそうです。
ボブス一家は仕事がなくなり、新しい仕事を探す必要が出てきてしまいました。
ボブスは、あの時勇気を出して早めにトルマンさんに相談していればこんなことにはならなかったはずなのに、と後悔しました。しかし後の祭りで、仕事はもうありません。ボブスは泣く泣く、別の仕事を探すのでした。

この本を読んで

久しぶりにこの本を読んだ、図書館の館長は深いため息をついた。
それを見ていた、司書のゴシカは館長に声をかけた。
「なに、どうしたの、館長。柄(がら)にもなく、深いため息なんてついちゃって」

ゴシカは笑って、白い歯を覗(のぞ)かせた。親しみのある顔で、みんなのお母さんのイメージを集合させたらこんな人になるのではないかという女性だった。背は低いが、肝っ玉(きもったま)は大きい。肝っ玉母ちゃんといった女性だった。

館長はメガネをかけ、身長は高いのだが小太りでかなり猫背な男であった。おじさんとおじいさんの間くらいで、おとなしく、柔らかい(やわらかい)印象の男性である。

「いやあ、ゴシカさん。この本を久しぶりに読んでいたんですけどね、なんか心が暗くなってしまいまして」

そういって読んでいた本をパタンと閉じて、膝元(ひざもと)に置いた。

「ふうん、それ、どんな本なの？」

「勇気を出して人に相談ができなかったために、後々大変な目に会う男の話です。くよくよせず、勇気を出せというメッセージ性を感じます」

ゴシカは、今日返却(へんきゃく)された本を片付けていたが、館長の元に歩み、横に座った。そしてパラパラとその本を読んでから言った。

「うん、なるほど。なんかごもっともな主張ね。人に迷惑をかけないように、早めに相談しなさいってことかしら」

「そうですね。でも、これってできたら苦労しないと思いません？」

伏(ふ)せ目がちな館長はゴシカに同意を求めた。

「うーん、まあ確かに館長の言うこともわかるわね。このボブスという主人公だけを責めるのはちょっと酷(こく)な気がするわね。この人も悪気があってやったわけじゃないしね」

そうなんです、と言って、館長は話を続けた。

「そこなんですよ、ゴシカさん。別にこのボブスという男は、トルマンさんを困らせようとしてやったわけではない。逆にトルマンさんから攻撃されないように、自分を守っていただけなんです」
でもさ、とちょっと反論気味にゴシカは言った。
「結果が全てとは言いたくないけど、やっぱここは一家の大黒柱として、ボブスは頑張らないといけないところだったんじゃないかなぁ。この家族でお金を稼げるのはボブスだけなんだから、今相談しなかったら後々関係性が悪化することはよく考えればわかることじゃない。それをやらなかったことは、ボブスの自業自得とも言えるんじゃないかしら」
ポリポリと頭を掻いて、困ったような声で館長は話した。
「それはものすごく正論だし、そうすべきなのはわかっていますけど、百人いて百人これができるかと言われればそうではないと思うんですよね」
「でも一人でもこれができるようにしたくて、この本の作者はこれを書いたんじゃないの？」
まあそうなんですが、と言ったとき、図書館に一人の少女が入ってきた。
近くのダンケ学校に通う子で、スイスイという女の子だ。
「あら、スイスイちゃん、いらっしゃい、もう学校は終わったの」
時計を見れば、もう三時近くになっていた。
「うん、学校終わって、本読みたくて来たの」
「あら、嬉しい。ゆっくりしていって」
そこでスイスイは、館長の膝元にあった本に気づいて言った。
「館長さん、その本なあに。面白いの？」
「うーん、おもしろいというか、ちょっと心が暗くなっちゃうかなぁ」

自信なさげに館長は言った。一応それでもスイスイはその本を取り上げて読んでみた。そして段々と顔が悲しくなっていった。読み終わって、スイスイはこう言った。
「なんだかこのボブスさんって可哀想(かわいそう)。きっと相談できる人がいなかったんだよ」
「相談？」
はっとした顔で、館長はスイスイに聞いた。
「そう、相談。たぶん、ボブスさんとトルマンさんはそんなに仲が良くなかったんじゃないかな。だって、仲良かったらすぐ相談できるもの。それに奥さんにも相談できなかったんじゃないかな。心配させたくないとかで。だからボブスさんは勇気がないんじゃなくて、きっと優しすぎたのよ」
なるほどね、と言った顔で、ゴシカが言った。
「確かに、ボブスはあんまり自分の悩みとかを相談するタイプじゃないかもね。でも優しすぎるって難しいわね。後々嫌なことが起きるとわかっていたら、それを解決する強さもないといけない」
うーん、そうなのかな、と前置きして、スイスイは言った。
「私は強さとか優しさとかよくわからないけど、別に変に自分を変える必要、ないと思うけどな。ボブスさんは優しい。でもそれが弱点っていうか、あんまり強く言えないとか、そういうのと一緒な気がする」
コクリとうなづき、館長が言った。
「なんとなく、私は合点(がてん)がついてきました。うまく説明はできないですけど、ボブスはこのままでいいと思います」
ギョッとした顔で、ゴシカは反論した。

「なに言ってるのよ、館長。ボブスが勇気を持たないままだったら、このまま中途半端な対応が続いて、この本の最後みたいに食いっぱぐれちゃうわよ」
「でもですね、ゴシカさん。人はそんなにすぐに変わらないと思うんです。特にパーソナルな部分はね。それにボブスも本当に差し迫ったら、トルマンさんに相談しました。できるものはできる。できないものはできない。それでいいんじゃないかと思います」
納得が行かなそうで、ゴシカは再び言った。
「えー、私は全然そうは思わないなー。ダメなことがあったら改善しないとずっとそのままよ。何も変わらない。自分の意思と力で変えていかないといけないと思う」
私は・・・と遠慮(えんりょ)がちにスイスイは言った。
「館長さんのお話も、ゴシカさんのお話も、どっちも間違ってないし、合っていると思う。その人らしさを大切にもするべきだし、かといって良くないところは治さないといけないと思う」
「結局、結論は出ずってことね。」
ゴシカは諦めて立ち上がった。館長は立ち上がって、カウンター中央にある、「今週のおすすめコーナー」に、この本を置いた。
「えー、館長、その本、今週のおすすめにするの？」
明らかにゴシカは不満そうだ。にっこりと微笑み、館長は言った。
「これは重要なテーマだと思います。個人の尊重か、集団の尊重か。この本は集団を尊重させるテーマなのでしょうが、これが行き過ぎると個人の特性を殺してしまいます。おそらく個人と集団、ゼロか百かではなく、グラデーションなのでしょう。個人が強すぎれば集団を優先し、集団が強ければ個人を優先する。それがうまく機能(きのう)する仕掛けがあるといいのでしょうが」

日がよく当たる図書館で、その本は、その光を浴びて佇んでいた。
スイスイはその様子が、とても綺麗(きれい)なものに見えたのであった。

第2章　アリとキリギリスと、〇〇〇

よく知られた話

あるところにアリとキリギリスがいました。アリは暑い時でも一生懸命働きました。
一方キリギリスは遊んでばかりでロクに仕事もしません。キリギリスは一生懸命に働いているアリを見て、
「なんでそんなに働くのだい。もう少し余暇を楽しみたまえよ」
と言って、小馬鹿にしたように笑いました。
しかしアリはそんなキリギリスの嘲笑には目もくれず、ひたすら働き続けました。
そして冬になりました。冬になって食べるものがなくなり、困ったキリギリスはアリの家を尋ねました。
「すまない、アリさん、寒いし食べるものもないし、死にそうなんだ。どうかここにいさせてくれないか」
しかしアリは冷静にこう言いました。
「キリギリスさん、あなたは夏の間、ちっとも働かず遊んでばかりいたね。そんな怠け(なま)者に与えるものなんて、一つもないよ」
そう言って、家の扉を閉めてしまったのでした。

どちらが正しいのか

久しぶりにこの本を読んだタール村図書館の館長は、ふうと一息ついて本をベンチに置いた。
その様子を見た司書のゴシカは館長に声をかけた。
「どうしたの、館長」
聞かれた館長は答えた。
「いや、この有名なアリとキリギリスですがね、この話を見ると、なんだかアリが正しくて、キリギリスが間違っている、そんなメッセージを感じるのです」
そう言われて、ゴシカはさも当然と言った様子で答えた。
「それはそうよ。この童話は、遊んでばかりいると、後々酷い目に遭うっていう典型的なお話じゃない」
「それはそうなのですが、私にはどうしても、このお話が好きになれないのです。
本当にキリギリス的な生き方はだめなのでしょうか。アリの生き方は酷すぎます。くる日くる日も働いて、おおよそ余暇(よか)に関する記述は出てきません。一方キリギリスはどうでしょう。彼は自分の人生を謳歌しています。それにアリは残酷すぎませんか。確かに長期的に考えられなかったキリギリスには非があるでしょうが、救いの手を差し伸べないところに残酷さを感じます」
確かにね、と言ってゴシカは話した。
「そうね、館長の言うとおり、アリはちょっと残酷よね。なんだかアリとキリギリス、どっちも極端だから、中くらいの生き方がいちばんいいなって、私は思うけど」
ウンウンとうなづいて、館長は続けた。

「私が思うのですがね、どっちがいい、悪いではなく、好きな方を決めればいいと思うのです。働きたかったら働けばいいし、遊びたいなら遊べばいい。どっちがいいとか悪いとか決めてしまうから、良くないと思うのです。」
今日は近くにあるダンケ学校の生徒、スイスイも図書館に来ている。スイスイは二人の会話を聞いて、こう言った。
「なんだかいいとか悪いとかそういった物差しみたいなのがあるって、私は思っちゃうな。テストの丸かバツかみたいな感じで、世の中にも、そういう正解、不正解みたいなのがあると思う」
ゴシカはスイスイに対してこう言った。
「そうね、どうしても学校だと、合っているものと間違っているもの、はっきりと二分されているような感覚に陥(おちい)るわね」
コクリとうなづき、館長は言った。
「でも本当は違うのですよね。本当は合っているものも間違っているものもない。あくまでそれは一つの基準で合って、それに従うのではなく、従うべきは自分がどうしたいかなのですよね」
でも、と言って、スイスイは少し暗い顔をして言った。
「人と違うことをするのって、怖いよね。だから本当はしたいことを我慢して、周りの人から怒られない方を選んだりするんだと思う」
ゴシカは暗い顔をしたスイスイの肩にそっと手を置いて言った。
「難しいわよね、人を優先した方がいいときって、実際あるもんね。でも自分を優先しないと、なんだかどんどん元気も無くなっていくしね」
館長は一息ついてから、話をした。

「自分で決めること、いや、決めれることは再認識した方がいいと思います。絶対的権利は自分にあることを認識しないと。
　あと怖かったり考えたくない時は、”考えない”ことや、今は答えを出さないことを、決めてもいいと思います。つまり保留する、と自分で決めるんですね」
スイスイは先程よりか少し明るい顔で館長に言った。
「怖いけど、不安だけど、自分で決めていいんだよね」
ゆっくりとだがしっかりと、館長はうなづいた。
「そうだよ、スイスイさん。自分で決めていいんだよ」
それでその日三人は別れた。しかしどうしてもアリとキリギリスの話が忘れられない館長は、自分なりに、アリとキリギリスを書き直してみた。

アリとキリギリスと、○○○

あるところにアリとキリギリスがいました。
アリは毎日せっせと働いていましたが、キリギリスは毎日遊んでばかりでした。
そして冬になりました。アリは毎日働いていたので、たんまりと食べ物があります。それに巣もちゃんと作ってあったので、暖かい家もあります。
一方キリギリスは遊んでばかりいたので、食べ物も家もありません。

いえ、正確に言うと、遊んでばかりではなかったのです。キリギリスは自分が得意なこと（歌を歌うことだったのですが）で、みんなに注目されたい、またそれで喜んでもらって食べ物をもらったりなどすることができないか、チャレンジしていたのでした。
はたから見たら、歌を歌ってばかりで、アリみたいにせっせと働いてはなかったので、そうは見えなかっただけで、キリギリスはキリギリスなりに、自分の夢に向かって挑戦していたのでした。
しかしなかなかそれは実らず、食べ物が少ない状態で、冬になってしまいました。冬になると食べ物はほとんどありません。
ほとほと困ったキリギリスは、食べ物がありそうなアリの家を訪ねました。
しかしアリはキリギリスに食べ物を与えることなく、バタンと家の扉を閉めてしまいました。
雪が降ってきました。手足は痺れ、お腹と背中がくっつきそうです。
疲れてもう歩けなくなりました。お腹がペコペコです。ここまでかと、キリギリスは絶望しました。
あの時、歌を歌う夢を諦め（あきらめ）、アリのように毎日働けばこんなことにはならなかっただろう。自分は大馬鹿者だったのだろうか。
しかし、キリギリスの頭には走馬灯（そうまとう）のようにこれまでの人生が浮かび上がってきました。
歌を歌って、お客さんが喜んでくれた様子。
全然お客さんは来ないのだけれども、それでもキリギリスを慕（したっ）ってその様子を応援してくれたお客さん。
決して多くの人を喜ばせられたわけではないけれど、片手で数えられるくらいの人は、自分の好きなことで喜ばすことができた実感がありました。

とりあえずまだ自分は生きている。もう少し雪を凌げ(しのげ)られる場所に行って、今日をなんとか乗り越えよう。ちょっと歌を歌うことに今年は集中しすぎてしまったから、来年はもう少し働いて、食べ物を得られるように反省しよう。

よいしょと腰をあげ、歩き出そうとした時、なんとよくキリギリスの歌を聞きに来てくれたバッタが現れました。

「キリギリスさん、大丈夫かい、こんな雪の日に」

「バッタさん、君こそどうしたんだい」

いや実はと言って、バッタが先を続けました。

「周りのみんなからキリギリスさんが食べ物がなくて困っていそうだという話を聞いてね。それで助けに来たんだよ」

実はキリギリスは歌を歌うだけでなく、心の根っこには誰かの役に立ちたい、困っている人を助けたいという気持ちがあったので、人助けをよくしていました。それもあってか、みんなからは慕われていたのです。

バッタに引きつられ、なんとかキリギリスは食べ物にありつけました。

キリギリスはバッタに感謝すると共に、もっとみんなの役に立とうと思いました。

そして自分の好きな歌を続ける決心は変わらず、また来年も頑張ろうと思って、年を越したのでした。

第3章　レンガ職人(しょくにん)のコスパ

三人のレンガ職人の話

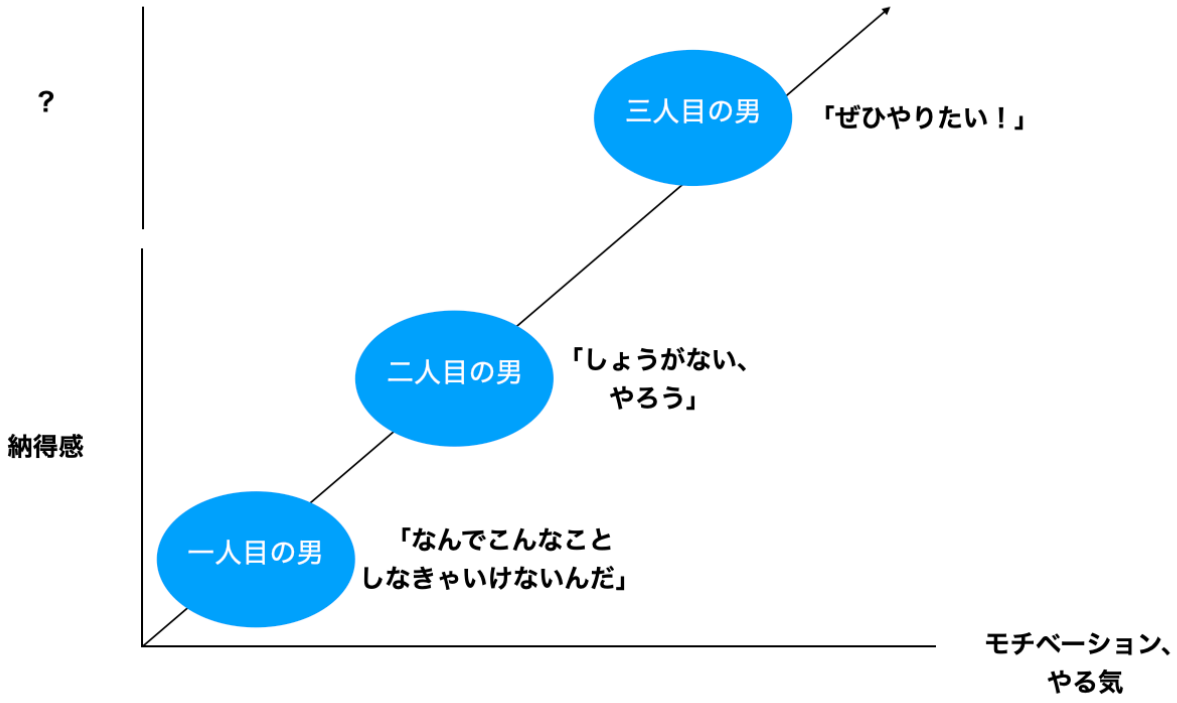
ある男が旅をしていると、難しそうな顔をして、レンガを積み上げている職人に出会いました。
「レンガ職人さん、だいぶお辛そうな顔をしていますね。大丈夫ですか」
そう声をかけると、レンガ職人は、
「放っておいてくれ！おれはこれからずっとこのくそつまらない仕事を続けなければならないんだ。暑い日も寒い日も重いレンガを運ばなきゃいけない。おれは世界一の不幸ものさ。だから放っておいてくれ」
と叫びました。
とりつく島もないようなので、男は旅を続けました。そうすると、先程よりは穏やかな顔をしたレンガ職人に出会いました。
そのレンガ職人は
「僕はまだ幸せな方です。この仕事があるおかげで、自分と家族を養(やしな)うことができている。他の場所に行ったら、食うに困るところがたくさんあります。一方自分には仕事があります。僕は幸せな方なんですよ」
と言って、また仕事に戻って行きました。
さらに旅路を進めると、立派なレンガ作りの教会が現れました。
そこに立っているレンガ職人に話を聞いてみると、こう答えてくれました。

「私は世界一の幸せ者です。こうやって、みんながお祈りができる教会を作ることができました。これもみんなと一緒に協力して、大変なレンガ作りをまっとうしたためです。道のりは非常に厳しい者でしたが、こうやってみんなに喜ばれる場所を作れて、私は幸せものです」
そう言ったレンガ職人は満足そうな笑みを浮かべるのでした。

仕事とモチベーション

図書館の館長は、この本を読み終わると、そばにあった暖かい紅茶を少し飲んだ。紅茶は先程ゴシカが淹れ(いれ)てくれたものだ。
良い香りと暖かい飲み物が喉を通過する。しかし館長はなにか腑に落ちないものを感じていた。
「館長、また何か考え事をしているわね」
そう言ってゴシカが近づいてきて、館長の左前にある椅子に座った。
館長はおもむろに口を開いた。
「ええ、ゴシカさん。この有名な三人のレンガ職人の話なんですがね」
「あら、有名な本じゃない。人のやる気とかモチベーションについて書かれた寓話よね」
そうですと言って、館長は続けた。
「要は何をゴールとするかで人のモチベーションは全く変わるよ、ということを言いたいのだと思います。
　あとは納得感ですかね。最初に、文句ばかり言うレンガ職人が出てきますが、彼は自分が働く理由がわかっていません。生きるためにしょうがなくやっている感じがします。

二人目の男はまだましと言えるでしょう。生きるためにはこの仕事をしなくてはいけない。それを納得した上で、働いています。
最後の男はかなり前向きに仕事に取り掛かっていると言えるでしょう」
そこに、学校帰りのスイスイが口を挟んだ。
「どうして最後の人は、やる気があったんだろうね」
ゴシカはスイスイの言葉を受け、自分の主張を展開した。
「やっぱり人の役に立てるっていうことがすごく大事だったんじゃないかしら。自分がやっていることが人の役に立てるってことがわかれば、かなりモチベーションは上がると思うわ」
また、そうですねと言って、館長は紙に何か書き出した。書き終えるとゴシカとスイスイに見せた。
それはこんな図であった。

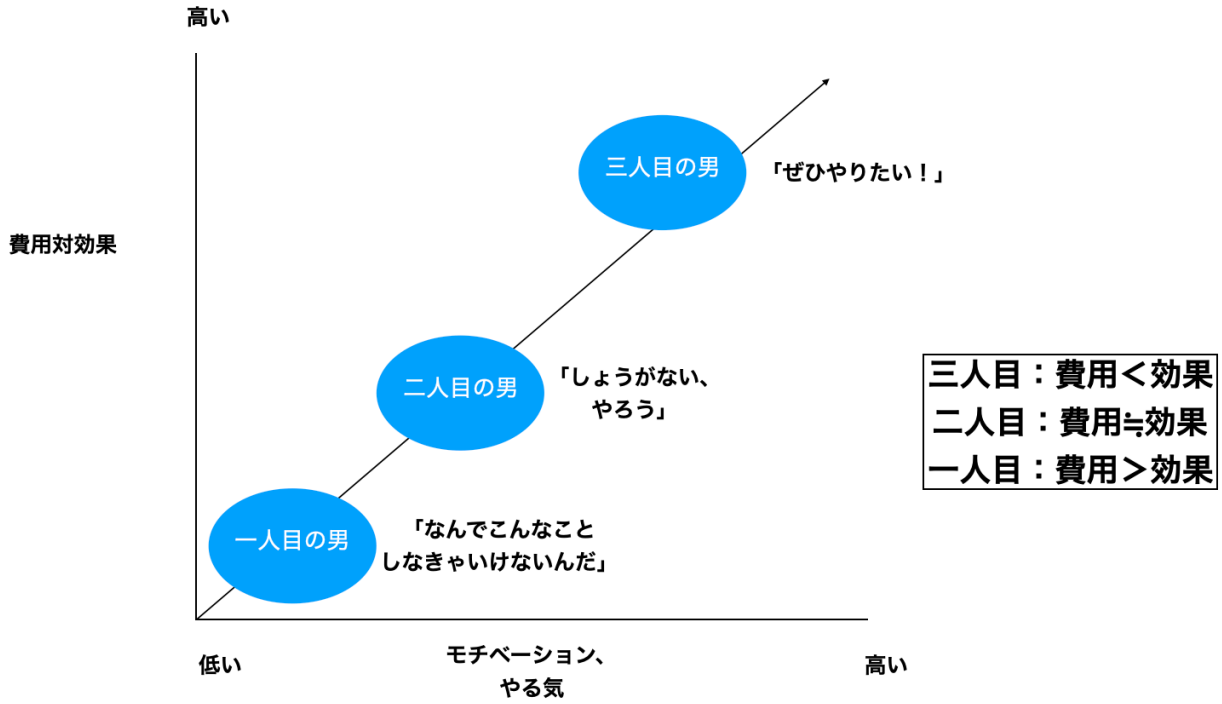

?
納得感
三人目の男
「ぜひやりたい！」
二人目の男
「しょうがない、
やろう」
一人目の男
「なんでこんなこと
しなきゃいけないんだ」
モチベーション、
やる気

館長はこのグラフを見せてから、話を続けた。
「自分が今やっている仕事に、意味を見出せているか。見出せておらず、納得していないと、モチベーションは低い状態です。一人目の男がそれに当たるかと思います。
自分のやっている行為に納得、いくらか渋々やっている面もあると思いますが、そういった人は二人目の男につながると思います。
そして、三人目の男ですが、これは納得しているかと言われれば、少し違う気がしています。二人目の男で十分納得していると思うのです。違う何かの要素が三人目の男にはある気がします」
このグラフを見たゴシカが発言した。
「それって、いわゆる費用対効果（ひようたいこうか）じゃない？」

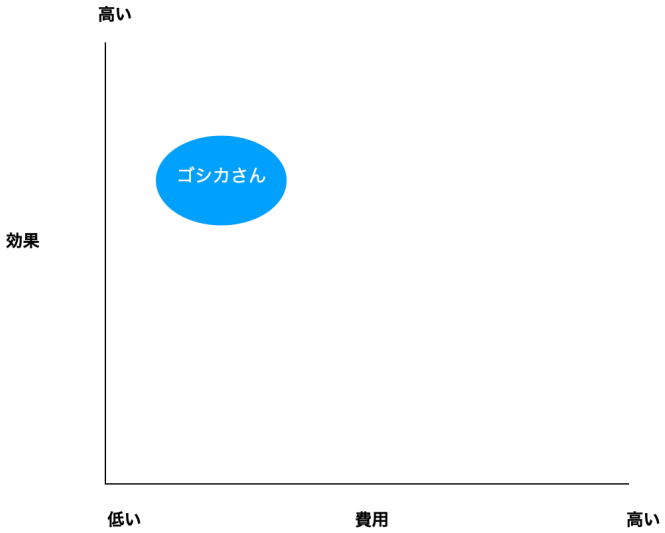
費用と効果

言葉の意味がわからなかったスイスイは、
「ひようたいこうかってなに？」
とゴシカに聞いた。
「費用対効果って何か自分が頑張ったお返しがちゃんと来るかどうかってことね。
例えばスイスイちゃんが頑張って何時間も勉強してテストに臨んだのに、点数があんまり良くなかったらどう思う？」
それを聞いたスイスイは、

「残念だなって思う。すっごく勉強したのに、なんだか無駄になった気がして、次勉強する気が起きなくなっちゃうかも」
と答えた。それに対しゴシカは
「そうだよね、せっかく頑張ったのに結果が出ないとやる気なくなっちゃうよね。こんな感じで頑張って使った時間をここでは”費用”と言って、テストでいい点数を取れることを”効果”って呼んでいるのね。つまり自分が持っているものを使って、どれだけの効果が出たかを費用対効果って呼んでいるわけね」
と、スイスイに説明した。
館長はおずおずとゴシカに尋ねた。
「それで、なぜ三人目の男が費用対効果と関係があるのでしょうか」
質問されたゴシカは答えた。
「私の考えはこう。つまり三人目の男は辛い仕事、これが費用ね。をしてまで、教会が作れることがお釣りが来るくらいの効果が出ていると感じているのよ」
ちょっと驚いた様子で、館長はびくりと体を震わせて、話した。
「なるほど、人の役に立てることがとても効果が高いので、辛い仕事に対する費用が気にならなくなっているということですね」
やや興奮気味な館長は先程のグラフを一部修正して、二人に見せた。


高い
費用対効果
三人目の男
「ぜひやりたい！」
二人目の男
「しょうがない、
やろう」
一人目の男
「なんでこんなこと
しなきゃいけないんだ」
三人目：費用＜効果
二人目：費用≒効果
一人目：費用＞効果
低い
モチベーション、
やる気
高い

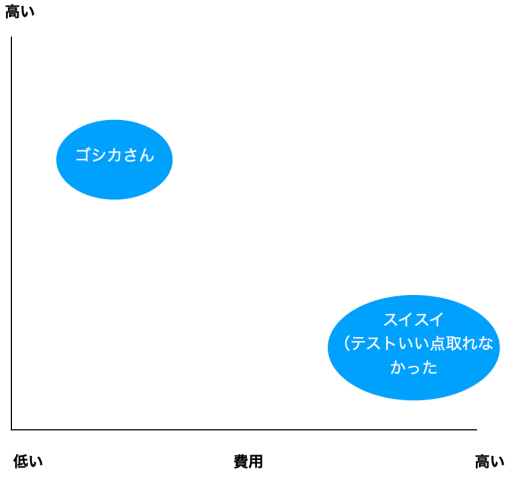
「なるほどね、いいグラフね。やっぱり費用対効果ってことなのかしらね」
問うゴシカに対し、館長は答えた。
「一つの仮説ではありますが、良い仮説ではあると思いますね。人は打算的な生き物です。どれだけ自分にメリットがあるかを敏感に察知します。
一人目の男は自分の重労働に対し、報酬が見合ってないと”決めて”しまっていた。
二人目の男は労働と報酬が大体一致している、もしくは報酬の方が少し上くらいに感じていそうですね。
三人目の男は人の役に立てるその喜びが大きすぎて、労働を苦ではなくなってしまっています」
「どういうふうにお仕事を見ているかってことで、人によってこれだけ違うんだね」
スイスイは驚いた様子で独り言を言った。その言葉を受け取った館長はこう答えた。
「びっくりですよね、スイスイさん。仕事や労働は肉体を使ったり、人との交渉ごとにはストレスを伴うものですので、決して楽しいことばかりではありません。しかしその支払った”費用”に対し、どれだけの効果、報酬が出るかで、人間のやる気が違ってくるように思えます」
ただそこでゴシカがあることを投げかけた。
「でもさ、館長。私、この図書館で働くこと、好きよ。みんないい人ばかりだし、私本好きだし、本を整理するのも嫌いじゃない。これってこのグラフでいうと、どの辺に当たるのかしら」
それは多分、と言って、館長は新しいグラフを書いて、ゴシカに見せた。



「ゴシカさんは嬉しいことに、ここで働くことをそこまで苦に思ってないということだと思います。だから"費用"は低いんですね。一方好きな本に触れられたり、来館されるお客さまとのコミュニケーションを楽しんでおられる。だから"効果"は高い。この左上のゾーンにいると幸福感を感じられるかもしれません」

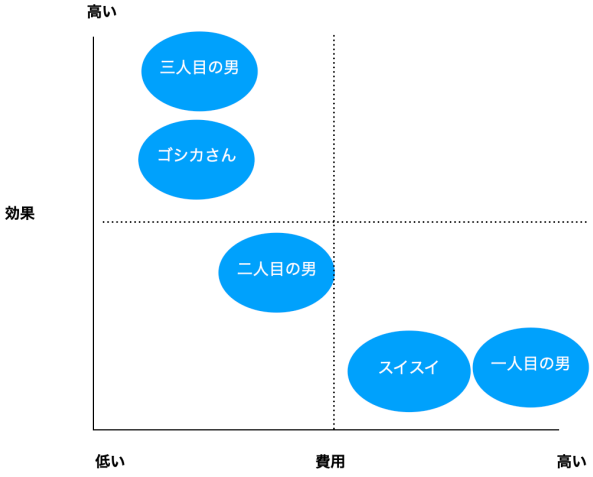
スイスイは自分のかばんから鉛筆を取り出して、書き足した。

「私が頑張ったのにテストでいい点数を取れなかったら、ここになるのかな」



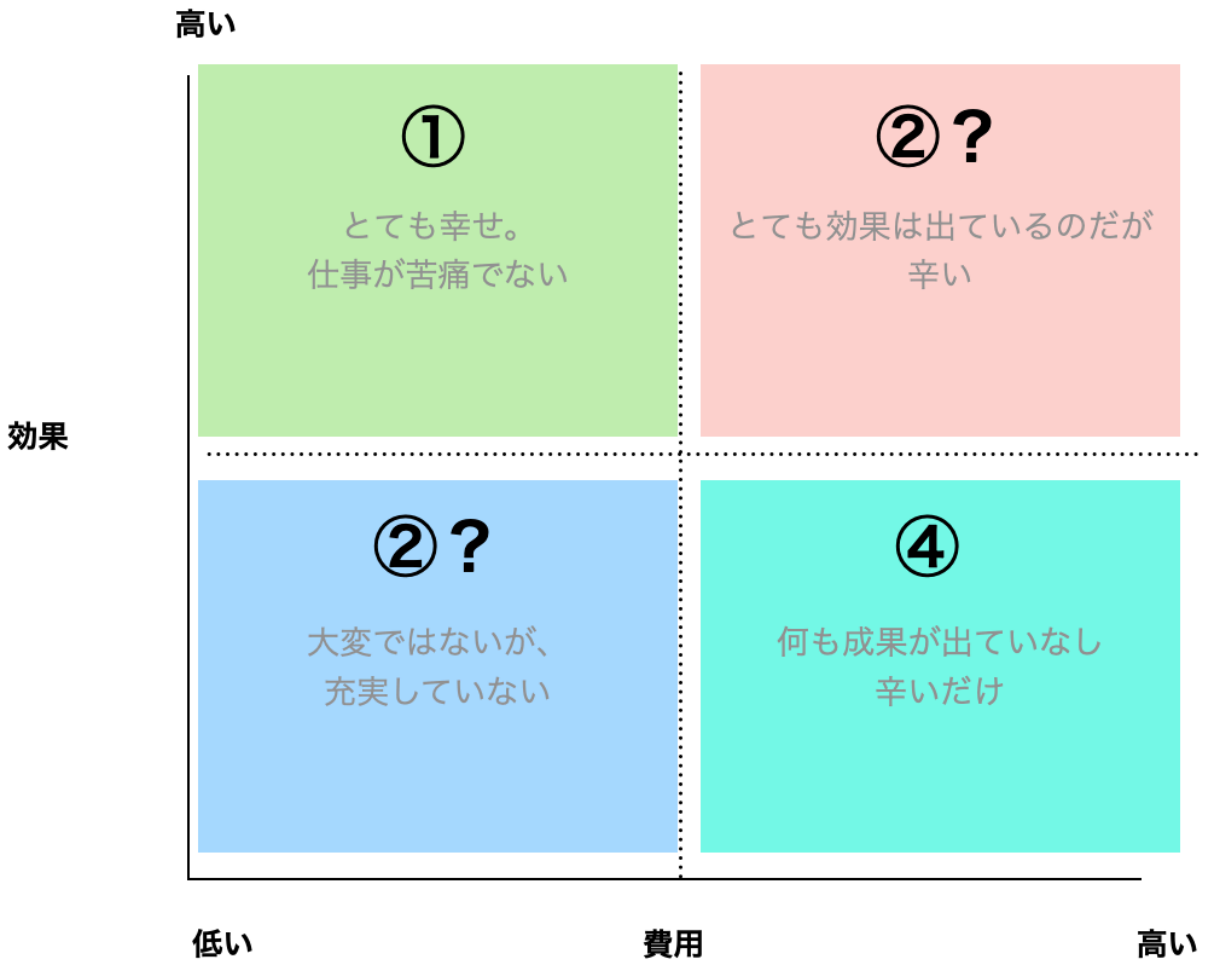
館長は答えた。

「そうですね、せっかく頑張ったのにいい点を取れなかったら、ここになりそうですね。おまけにレンガ職人もここに入れてみましょう」



そう言って、館長はグラフに色々と書き足してみた

「そしてもしかすると、幸福度はこの順番で決まるのかもしれません」



「一番幸せなのは費用が少なく、効果が高い左上のゾーンでしょう。三人目の男やゴシカさんがこれに当たります。

今回は例で出ませんでしたが、右上の、効果は出ているが支払う費用も高いので大変だというパターンですね。これは仕事が高給だが、激務の仕事をしている人などが当てはまるのではないでしょうか。

そして下の段の左ですね。費用も少なく効果も低い。ここもなかなかモチベーションは上がらなそうです。右上と左下、どちらがまだ良いか、これは個人差が出るところでしょうね。

そして一番モチベーションが低くなるのは右下。費用ばかりが高く効果が出ていない。」

ゴシカが納得の行った顔で言った。

「すごくわかりやすい。この図は人のモチベーションを説明しているのね」

館長はうなづきこう言った。

「はい、やはり幸せになるためには左上、つまり自分があまり辛くないのに報酬が多いところに行くべきなのでしょう。報酬というのはお金の面だけでなく、人から感謝されるとかそういった対人関係も含むのでしょうね」
スイスイは警鐘を鳴らすかのように、少しつぶやいた。
「なんだか頑張っていると、いい気持ちになっちゃうから気をつけないといけないよね。右の方に行きがちだから気をつけないとね」
ゴシカはそう言ったスイスイに対し、話した。
「別に頑張ること自体は悪いことじゃないけどね。右上の②は悪くないと私は思うの。頑張って成果を出さなきゃいけない時はあるものね。でもずっと②はしんどいっていうのは私も賛成。そもそも私頑張るの苦手だし」
そう言って、ゴシカはおどけ顔をした。
館長は「今週のおすすめコーナー」に三人のレンガ職人の本を置いた。少し前に「アリとキリギリス」を自分で書き直し、それを本にしたものを置いていたが、それの代わりにこの本を置いた。
そして今日三人で話したこのグラフや図たちも参考に、その側にそっと置いたのであった。

第４章　伝説のゲーム

熱中しすぎるゲーム

あるところに、伝説のゲームと呼ばれるものがあった。
そのゲームは本当におもしろく、現実世界を離れ、あたかもそのゲームの中が現実だと錯覚してしまうほどだった。
そのゲームは本当にリアルで、ゲームだから絶対に死んだりすることはないのに、ゲームをクリアできなかったら死んでしまうと、本当に思ってしまうほどだった。
だからそのゲームをクリアするために、プレイヤーは死に物狂いでクリアを目指すのであった。
クリアをするためだったら、現実世界であれば少し躊躇（ちゅうちょ）してしまうことも平気でやってのけてしまった。それは現実世界で、生きるためだったら何をやってもいいと思うことと似ていた。本当はゲームをクリアしなくても、なんの問題もないのに。
そのゲームの名は「仕事」と言った。

なぜ仕事をするのか

スイスイは図書館に置いてあった、「伝説のゲーム」というタイトルの本を読み終わって、よくわからないなと思った。
そこに、司書のゴシカが来て、隣に座った。

「どうしたの、スイスイちゃん。怪訝な顔をして」
そう尋ねられたスイスイは、ゴシカに返答した。
「ゴシカさん、この「伝説のゲーム」っていう本を読んだんだけど、よくわからなかったの」
「伝説のゲーム？そんな本、うちにあったかしら」
「そう。この本はね、現実じゃないのに、あたかも現実のように錯覚して熱中してしまうゲームがあるの。そしてそのゲームの名前が仕事というの」
「仕事？」
不思議そうな顔をして、ゴシカは言った。
スイスイは話を続けた。
「私、まだ子どもだからよくわからないんだけど、仕事ってどんな感じなのかしら」
「仕事・・・そうねえ。基本的には、お金を稼ぐためにやっている、そういう認識の人が多いんじゃないかしら」
「ゴシカさんもそうなの？」
質問されたゴシカは答えた。
「私の場合はちょっと違うかな。お金を稼ぐのももちろんそうなんだけど、私は本が好きだから、それでここで働いているって感じかな」
「そうなんだ」
「仕事って難しいわよね。確かにその本に書いてあるように、一種のゲームと言っても、差し支えない印象もあるわ。でもその一方、生きるか死ぬかと直結している感じもある。あんまりサバイバルみたいな考え方になると、ちょっとピリピリしちゃう気もするわね」

そこに、奥の部屋から館長が出てきた。
「おや、どうしたのですか、お二人とも。おや、スイスイさんが持っている本は、「伝説のゲーム」ですね」
コクリとスイスイはうなづいた。そんなスイスイを見てか、館長はポツリと言った。
「私もここで働く前は、家族をかえりみず、ただひたすらに仕事をしていました。この仕事に失敗すると、食いっぱぐれる。家族を養えなくなる。そんな思いに駆られていたんです」
少し遠い目をして、館長は続けた。
「でもその仕事を辞めてわかったんですよね。他に仕事はたくさんあるし、別にその仕事を辞めたからって大したことはない。でもその仕事をしている時は、そこから失敗することを極端に恐れてしまうのですよね」
館長はメガネを外し、手で顔をゴシゴシと揉んだ。そしてこうも言った。
「仕事って、最初はもちろん生きるためという性質を強く持っていたんだと思うんです。でも次第に人間も進化していって、そこまで頑張らなくても食うに困らなくなってきた。
食べる、そして生きるという、生物として最終目標であったところをクリアしてしまったんです。生きることをなすために、役割を作って効率的に生きようとした。その役割を果たすことを仕事と言ってきた。でも今はそのゲームをクリアしてしまっている。では次、何を人間は目標とすればいいか」
「それが仕事だって、館長は言うの？」
ゴシカは館長に尋ねた。

「はい。人間は仕事というゲームを通じて、サバイバルの気持ちを思い起こそうとしているのではないでしょうか」

人間の性能本能と仕事

「サバイバルの気持ち？」
さらによくわからなくなった顔で、スイスイは館長に尋ねた。
「そうです。別に特段頑張らなくて生きれるようになってしまった人間は、昔のようにヒリヒリするような生活、つまり生きるか死ぬか、みたいな生活を送らなくてもよくなった。サバイバルチックな生き方をしなくてもよくなったんですね。
　でもそれでつまらなすぎるから、今までの仕事をもう少しデフォルメして、おもしろおかしいことをするようになった。そしてそこで、ヒリヒリするようなサバイバル、生きるか死ぬかのような感覚を感じ、今ここに生きていることを感じるようにしている」
「つまり、生きるという最終目標をクリアしてしまった人間は、新しい目標を仕事に見出そうとしている。そしてそれを生きるか死ぬかのサバイバルのような感覚でいるってこと？」
ゴシカの指摘は鋭かったようで、館長は大きくうなづいた。
「そうですね。しかし私のように仕事というゲームをしているのに、それに熱中してしまい他の大事なこと、たとえば家族とかですね。そういった要素をないがしろにしてしまわないよう、気をつけないといけませんがね」

仕事をゲームと捉えるなんて、不謹慎(ふきんしん)だという考え

「でも館長。一方、仕事をゲームとして捉えるなんて、ちょっと不謹慎だって言う人も多いんじゃないかしら」

「と言いますと？」

「だって、仕事をしないとやっぱりお金をもらえないのは事実なんだし、それをゲームとして捉えるなんて、もし仕事をゲームみたいに適当にやって、お金がもらえなかったら、それはそれで大変なんじゃないかしら」

ゴシカの指摘はもっともだ、とスイスイは思った。スイスイの両親もかなり真剣に自分たちの仕事に専念しており、ゲームのように遊びながら携わっているようには到底思えなかった。

「そこが非常に重要なポイントです。仕事とは生きるために必要なこと。それを真剣にやらないなんて不謹慎だ、そういった考え方をすることが、非常に危険なのです」

「どういうこと？さっぱりわからないわ。仕事を真剣にやるのは当然のことじゃない」

「ゴシカさん、私は仕事を真剣にやってはいけないとは言っていません。そういった考え方にとらわれてしまうことが危険だと言っているのです。

確かに仕事をすればお金が入ってきて、それで食べ物や服を買えて生きながらえることができるでしょう。そういった意味で、仕事をすれば生きながらえることができると言うのは真実でしょう。

しかし仕事の本質とは、誰かの役に立つことです。お金を貰いたい、自分が生きるためにやると言うのは本筋から外れてしまっていると思います」

少しの間、三人の中で沈黙(ちんもく)が流れた。

おもむろに館長は紙を取り出し、何か書き始めた。

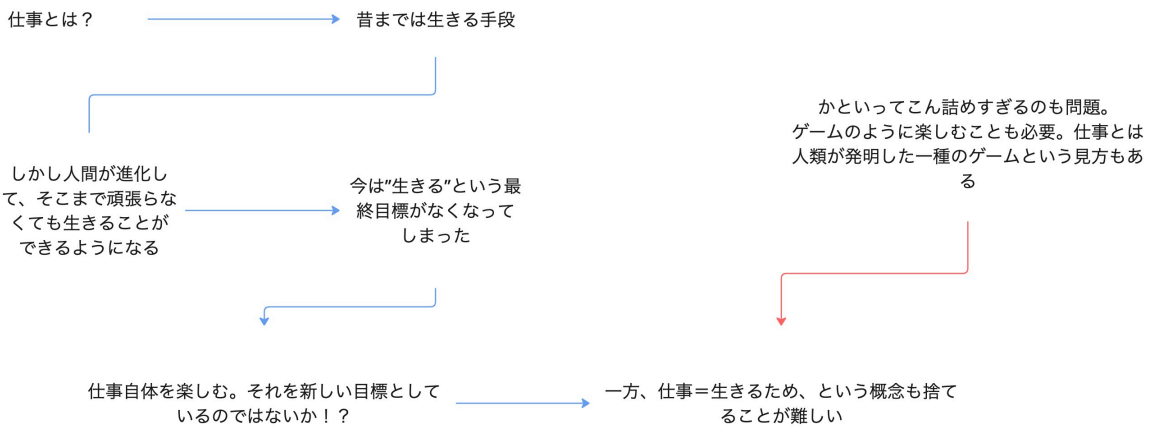
仕事とは？ → 昔までは生きる手段

しかし人間が進化して、そこまで頑張らなくても生きることができるようになる → 今は"生きる"という最終目標がなくなってしまった

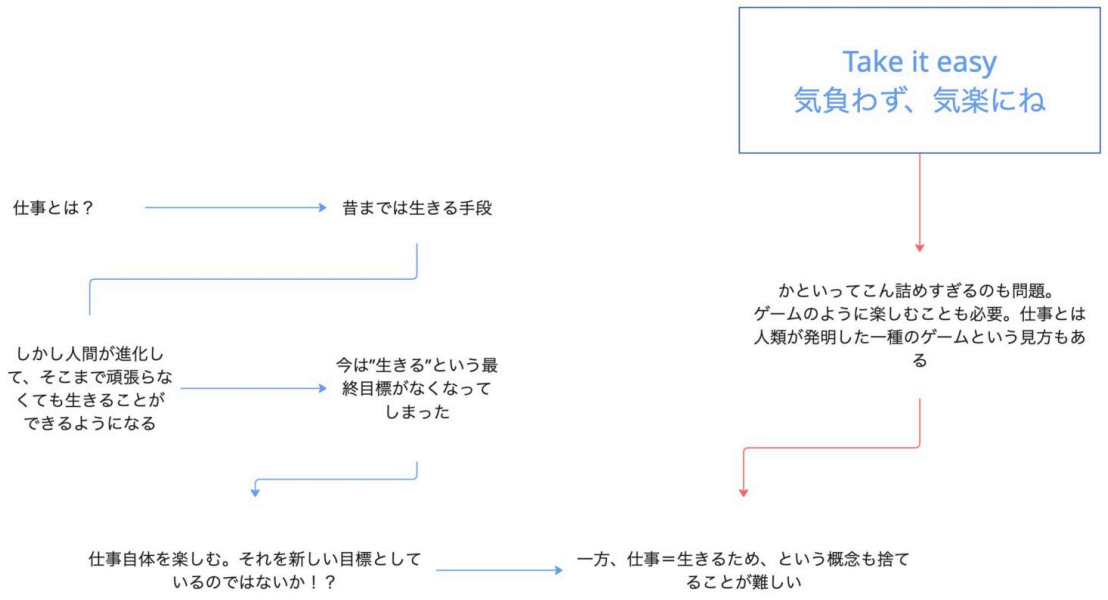
仕事自体を楽しむ。それを新しい目標としているのではないか！？

「つまり、仕事に対する見方、定義づけのようなものが変わってきているのだと思います」
館長が言った後、ゴシカが続けた。
「でも難しいのがその塩梅ね。確かに仕事の意味づけみたいなものは変わってきている感じはするわ。でもやっぱり昔ながらの”生きるため”というのはなかなか外すことのできない考え方だと思うの」
スイスイも言った。
「でも今までの話だと、やらなきゃ、やらなきゃと思っていると、ちょっと疲れちゃうから、仕事もゲームみたいに遊びの気持ちも入れた方がいいってことだったんだよね」
そうですね、と館長は言って、先ほどの紙に書き足した。

「こんなところですかね」
そう言って館長はペンを置いた。
「結局何が大事なことなんだろうね」
ポツリとスイスイはつぶやいた。
確かに、仕事をゲームと思ってやることも、一つの手段としてあり、また生きるために必要なものという観点も当然あるだろう。しかし館長にとってはある言葉が頭の中にずっとうごめい



ていた。
「結局のところ、”Take it easy”ってことなんだと思います」
「Take it easy?」
いぶかしがるゴシカに対し、館長は言った。
「はい、つまり”あんまり考えすぎず、気楽にやろうよ”、ということなんだと思います。生きるため〜〜とか、楽しもう〜〜とか考えてしまうと、なかなかそうはならないものです。だから少し肩の力を抜いて、あんまり気負わないことが大切だと思うんです。そういった意味だとその本みたいに、これはゲームだと認識することも大切だと思いますね」
館長はそう言って、そのフレーズを紙に書き足した。


Take it easy
気負わず、気楽にね
仕事とは？
昔までは生きる手段
かといってこん詰めすぎるのも問題。
ゲームのように楽しむことも必要。仕事とは
人類が発明した一種のゲームという見方もある
しかし人間が進化して、そこまで頑張らなくても生きることができるようになる
今は"生きる"という最終目標がなくなってしまった
仕事自体を楽しむ。それを新しい目標としているのではないか！？
一方、仕事＝生きるため、という概念も捨てることが難しい

館長は過去の自分を思い出していた。自分は仕事を最優先にし、家族をないがしろにしてしまっていたかもしれない。それも、仕事をしなければ食いっぱぐれるという、人間の生存本能のようなものが働いてしまっていたからだ。

でもそれは少し違っていたのだと思う。Take it easy。大丈夫、なんとかなるさ、気楽にね。

そんな言葉を過去の自分に投げかけたい、そう館長は思った。

そしてスイスイから「伝説のゲーム」の本を受け取り、今週のおすすめコーナーにそっと置いたのであった。

第5章　荷運び(にはこび)の馬

「荷運びの馬」

あるところに一頭の馬がいた。
その馬は毎日毎日、重い荷物を持って、人のためにその荷物を運ぶ仕事をさせられていた。
ある時、その馬の主人は思った。この馬はだいぶ歩くのが遅い。もっと速く歩いてくれたら、仕事であるこの荷物運びを終わらせられるのに。どうにかもっと速く馬を歩かせることはできないかと。
主人は馬を速く歩かせる方法を二つ思いついた。
一つ目は重い荷物を少し減らしてあげる方法だ。確かに荷物を減らせば軽くなった分、身軽に馬は歩いてくれた。
しかし運べる量が減ってしまうので、そもそもの仕事量が減ってしまう。この方法は採用できないなと、主人は感じた。
もう一つが鞭(むち)を打って、速く走らせる方法だ。その痛みを感じたくない馬は必死で歩き続けた。
しかし馬の疲労度(ひろうど)が爆発的に高まってしまい、怪我もしてしまった。この方法も取れないなと主人は悩んでしまった。
そんな時、ある農家がその様子を見て、何かを持って歩み寄ってきた。農家の手にあるのは一つのニンジンであった。そして農家は馬に声をかけた。
「おい、馬ちゃんよ。頑張って歩いたらこのニンジンをやろう。どうだ、頑張れるか？」

馬は目を輝かせ、うなづいた。そして張り切って歩き出した。その歩みは自信に溢れ、歩速もいつもより速かった。
そして重い荷物であったが、いつもより速く目的地につけ、農家は約束通り馬にニンジンを差し出した。
馬は喜んでそのニンジンを食べ、その顔は笑顔そのものであった。
この方法は良いと思った主人は、その農家からいくらかニンジンを買い、そのニンジンをあげる約束で、馬を速く歩かせる方法を続けた。
最初の頃は一本のニンジンで喜んで歩いた馬であったが、段々とその要求はエスカレートしていき、次に二本、その次は三本と要求するニンジンの数が次第に増えていった。
そんな多くのニンジンを買えない主人は、結局三本のニンジンをあげるのが精一杯になった。馬は三本のニンジンでは不満であったようで、あまり速く歩かないようになってしまった。
そこに別の馬がやってきた。その馬は二本のニンジンをくれれば速く歩いてあげるという。
主人は三本のニンジンを要求する馬を捨て、コンスタントにニンジン二本で速く歩く馬を飼うことにした。
欲張りな馬はその後、新しい主人を探すのにえらく苦労したとのことであった。

マイナスを増やす行為

この本を図書館で読み終わったスイスイは、司書のゴシカの元に歩み寄った。
「ゴシカさん、またよくわからない本があったの」

声をかけられたゴシカはスイスイの方を振り向いて言った。
「どの本？荷運びの馬・・・。どんなお話だったの？」
聞かれたスイスイは、内容を思い出しながら話した。
「なんかお馬さんの話だったんだけど、そのお馬さんは重い荷物を運ぶのが仕事で、ご主人さんがどうしたら重い荷物をもっと速く運べるかを考えていたの。
最初は荷物を軽くしたり、鞭を打って速く歩かせるのを考えたんだけど、うまくいかなくて、結局ニンジンを食べさせる代わりに速く歩いてもらうように方法を変えたの。
お馬さんも最初はニンジンを食べれるで喜んで速く歩いていたんだけど、だんだんと欲が出て二本、三本と欲しがる数が増えちゃって、少ないニンジンでちゃんと速く歩くお馬さんがやってきちゃったから、そのお馬さんは捨てられちゃうって話なの」
それを聞いたゴシカは、なるほどと言って、話した。
「なんだか二つのお話が混ざっている感じね。
一つ目は高い負荷（ふか）をかけるよりも、何かプラスのもので釣った方が、相手は動いてくれるっていうメッセージね」
「負荷ってなあに？」
質問してきたスイスイに、ゴシカは優しく答えた。
「うーん、重い荷物とか、大変なこととかとイメージは一緒かな。
例えばスイスイちゃんが学校に行きたくなかったとするでしょう。・・・まあそんなことはないと思うんだけど、仮の話ね。その時、なぜ学校に行きたくないかっていうと、ちょっと友達とケンカしちゃっていたり、嫌いな授業があるから行きたくなかったとするじゃない？

その時、マイナスの要素、友達とケンカしているとか、嫌いな授業とか、そういったものをまとめて負荷っていうの。まあ、マイナスなもの全部って感じかしら」
ふーんと言って、ある程度スイスイは納得した様子であった。
「じゃあこのお話の前半は、その”負荷”を多くして相手を動かすんじゃなくて、もっとプラスのことで相手を動かした方がいいってことなのかな」
「そうね、鞭で打っても痛いだけで、最初はその痛み、マイナスから逃れるために頑張るんだろうけど、体力と気力には限界があるし、そんなに長く続かないわ。
それよりは何かを与える、プラスの要素を与える方がいいっていうのが前半で作者が言いたかったことだと思うわ」
その時、図書館の片隅(かたすみ)にある休憩(きゅうけい)コーナーで、大好きなケーキを三時のおやつで食べようとしていた館長も、話に加わってきた。一旦ケーキは置いておいて。

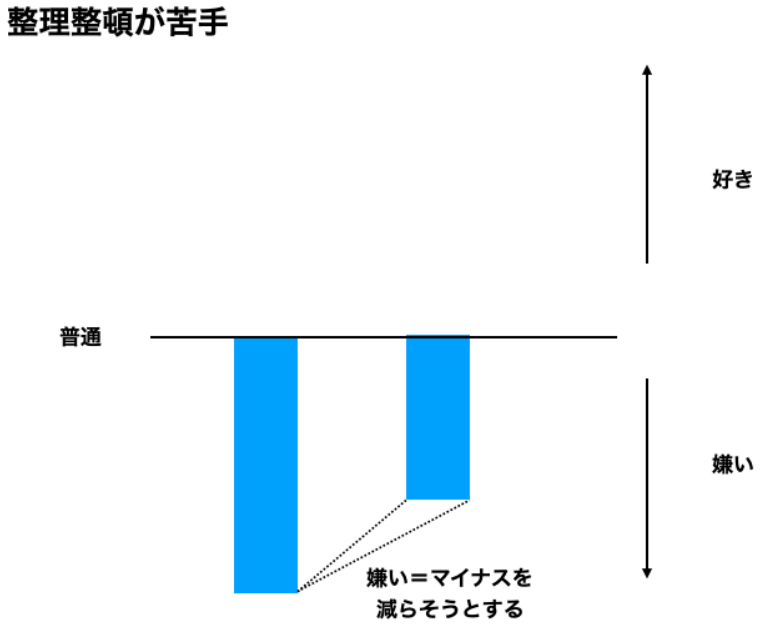
マイナスを減らす行為

「私は、その、重い荷物を軽くしてあげるっていうのが気になりますね」
そう言ってきた館長にゴシカは答えた。
「確かにそうね。飴(あめ)と鞭(むち)の話はよくあるけど、荷物を軽くする話はあんまり出てこないわね」
館長は少し考えてからポツリと話し始めた。
「私がその話を聞いて思ったのは、、、けっこう自分は重い荷物を軽くすることをしているなと思いました。

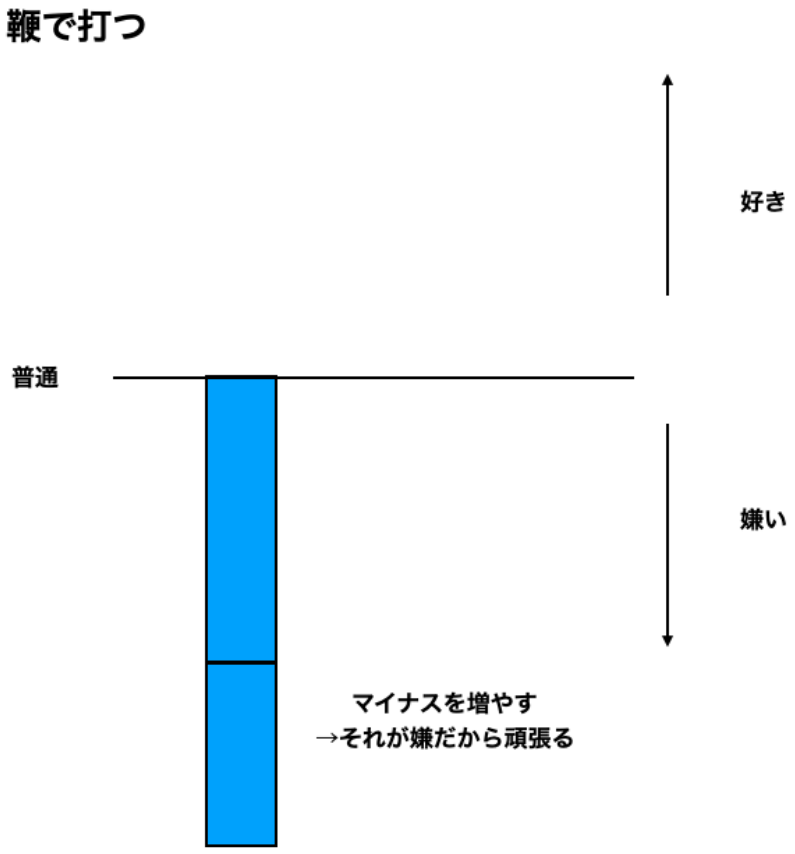
例えば私は整理整頓（せいりせいとん）が苦手なのですが、、、。これはゴシカさんがやってくれているので、毎日助かっているのですが、、、。苦手な整理整頓を、どうすれば嫌な気持ちでやらなくて済むかよく考えるんです。

例えば整理整頓をゲーム感覚でやることで、少しでも嫌な気持ちを減らすというか、そういうマイナスを減らす動きをよくするんです」

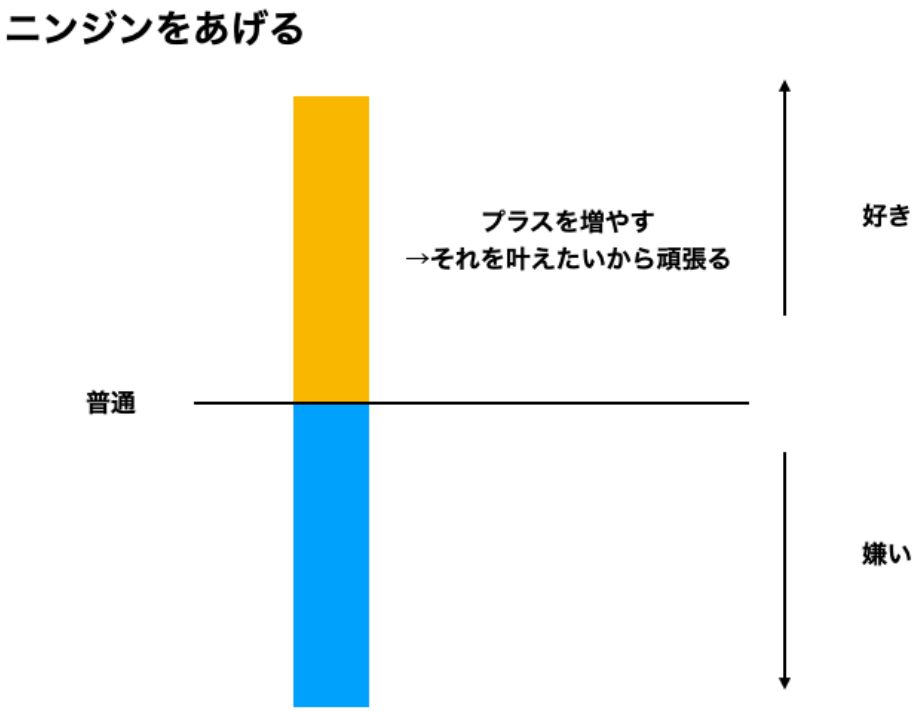
そう言って、館長は一枚の紙に何やら書き始めた。



「なるほどね、マイナスを減らすことで、気分をよくしようってことね」
ゴシカは納得した様子で、館長に対して答えた。
「鞭で打つということはこういうことでしょうね」
館長は言って、グラフに書き足した。



「じゃあ、ニンジンをあげることは？」
質問された館長は笑顔で返し、また書き足した。



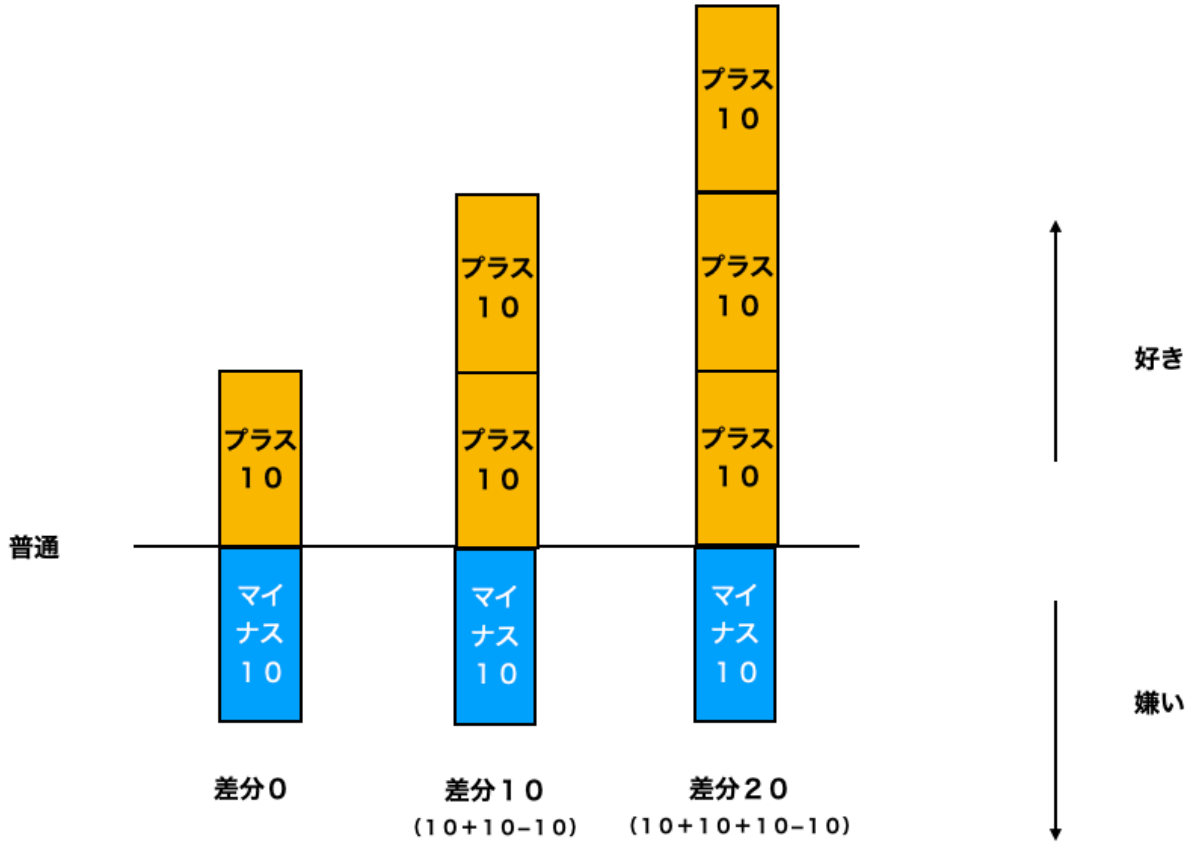
プラスを増やす行為

「要するに、この差分ということなのかしらね。好きと嫌いがあって、その引き算をしてあげて、どれだけ自分にプラスが残るか、それを見定めて行動しているのかもしれないわね」
興味深いといった様子で、ゴシカは話した。コクリと館長はうなづいた。
「でも、あれだね。ニンジンをあげ続けるとだんだんともっと多い量を欲しがるようになってくるっていうのが不思議だね」
本当に不思議だといった様子で、スイスイは独り言のように言った。それに対し、館長は答えた。

欲との戦い

「本当にそうですね、スイスイさん。人間は特にそうだと思うのですが、この差分をもっと大きくしたいと思うようなのです。本当に欲深いなあと思います」
そう言って、またグラフに何やら書き足し始めた。

あげるニンジンの数が増える



「最初は一本のニンジンで喜んでいたはずです。それがこのグラフの一番左の状態だとしましょう。でもだんだんとこれでは満足できなくなってくる、もう一本のニンジンが欲しい。それで二本目のニンジンを得られた時がグラフの真ん中の状態です。そしてさらにもう一本と欲しくなる。もうこれは際限がありませんね」

若干あきらめた様子で、館長は言った。

「そうね、欲は際限がないから、どこかで客観的にそれを見据えて、冷静にならないといけないわね」

ゴシカも同意して答えた。そしてスイスイは言った。

「どうすれば、欲は抑えられるんだろう・・・」

その疑問に対し、スイスイの肩に手を置いて、館長は答えた。

「難しいことですが、今の状態に満足することが重要だと思います。一本のニンジンや二

本のニンジンくらいでグッと自分を抑えられるようにする。自分を冷静に見つめ直すことも必要だと思います。ここはもう欲との戦いですね。さっき言ったように際限がありませんから」
スイスイは、うんとうなづいてくれた。
館長はスイスイが読み終わったこの「荷運びの馬」という本を受け取り、今週のおすすめコーナーに置いた。そして館長は休憩コーナーに戻った。そこには大好きなケーキが待っている。
これも欲との戦いだな。
そうは思っていても、一口食べると二口目、三口目と食べるのが止まらない館長であった。

第6章　みんなのヒーロー　ワガママン

ワガママン、参上

「はあ、もうどうにかならないかしら・・・」
そう言って母親は頭を抱えた。先程自分の子どもとケンカをしてしまい、子どもが部屋に閉じこもって、もう一時間ほど出てこないのだ。
母親の子どもは六歳。色々と物事を知って、生意気になる時期だ。子どもが全くおもちゃの片付けをしなかったので、少しきつめに叱ったら、「なんでそんなこと言われなきゃいけないんだ！」と逆に怒ってきて、プンスカしながら部屋に行って、閉じこもってしまったというわけだ。
母親も用があって、そろそろ出かけなければならない。子どもにも準備をさせて早く家を出たいのだが、部屋の鍵を閉められてしまい、無理やり連れていくこともできない。
あきらめの気持ちと焦りが入り混ざり、強いストレスを感じ、自然と貧乏ゆすりをしてしまっていた。
そんなとき、あのヒーローが現れた。
「大丈夫ですか、奥さん」
颯爽と現れたその男はヒーロー「ワガママン」。困っている人を見過ごせない、優しい男だ。
風貌がちょっと変わっていて、黄色いピタピタのスーツに、赤いブーツと手袋。それに顔にはマスクをしており、正体は不明だ。
それに胸には針と目盛りがふってあり、何やらメーターのようなものを胸につけていた。

パッと見たら怪しい男なのだが、今まで何百人もの困っている人を助けていて、この街のヒーローとなっていた。
「ああ、ワガママン。来てくれたのね。実は子どもが怒って部屋に閉じこもってしまって・・・。もう子どもも連れて出かけなきゃいけないのに、困っているの」
ワガママンは大きくうなづき、言った。
「それは大変でしたね、お母さん。でもぼくが来たからもう安心です。お子さんを必ずその部屋から出してあげましょう」
「ありがとう、ワガママン！」
ワガママンはそう言うと子どもが閉じこもっているドアの前に立った。

同調と同意

「やあ、ぼくはワガママン。君のお母さんがちょっと困っていてね。助けに来たんだ。君の名前はなんていうんだい」
優しく問いかけるワガママンに対し、少ししてから返答があった。
「ボブ」
「そうかい、君の名前はボブっていうんだね。教えてくれてありがとう。いい名前だね」
声の大きさから、どうやらドアの前に座っているようだった。ワガママンもドアを背に座った。
「ボブ、どうして君は部屋に閉じこもっているんだい」
「別に・・・。お母さんが全然僕のことをわかってくれないから、怒っているんだ」

「どういうことにボブは怒っているんだい」
そこからまた少し間があってから、ボブは答えた。母親は心配そうな顔でそのやり取りを見ている。
「お母さんはちょっと厳しすぎるんだ。少しおもちゃで遊んだだけなのに、すぐ片付けなさいって。まだもう少し遊ぶから出しておきたいだけなのに・・・。それを毎日言われてもう嫌になっちゃうよ」
ボブは不平不満をこぼした。ウンウンとうなづきながらワガママンは言った。
「本当に、君の気持ちはよくわかるよ、ボブ。せっかく遊んでいたのに、邪魔されたみたいで嫌だよな」
同意してくれるのが意外だったのか、ボブは嬉しそうに話を続けた。
「そうなんだよ、今日だって僕の超特製の積み木ブロックが完成したのにすぐにそれを片付けなさいって。これを作るのにどれだけ大変だったのか、お母さんはわかっていないんだ」
ウンウンとうなづき、さらにワガママンはボブに同調した。
「ボブ、ぼくもすごくわかるよ。せっかく一生懸命に君の作品を作っているのに、それを邪魔されるなんて、怒って当然だよな。そこのところ、君のお母さんは全然わかっていないな!」
なんとワガママンは子どもを説得するどころか、子どもの肩を持ち、母親を非難するようなことも言い始めた。
びっくりした母親は、少し顔が青ざめてしまった。
その時、ワガママンの胸にあるメーターがぐんと右に振れ始めた。
説明しよう。ワガママンがわがままを言ったり、わがままを言う人に同調したりすると、胸にあるメーターが右に触れる。右に振れた時がワガママモードで、思う存分、ワガママを言い続ける状態なのだ。

相手の気持ち

ボブとワガママンはそれから数分ワガママをお互い言い続けた。そうすると不思議なことにボブの気持ちも落ち着いてきたようで、最初よりも断然声の調子が明るくなってきた。
そこで、ワガママンはボブにこう言った。
「確かに、君の言うとおり、作品作りの邪魔をされたり、細かく言われたら嫌だよな。それは全くぼくも同意だ。
でも一方、お母さんはどうなんだろう。君がこうやって部屋に閉じこもったり、これから出かけなくちゃいけないのに言うことを聞かなかったら、どういう気持ちになるだろうか」
「それは・・・」
ボブは何かを言おうとしたが、言葉に詰まってしまった。ワガママンは話を続けた。
「君はお母さんが好きかい？」
「何を言っているんだい。大好きだよ、当たり前じゃないか」
そう即答したボブに向かって、ワガママンは言った。
「じゃあ、そんな君が大好きなお母さんが悲しむ顔を見たいかい」
少し泣きそうな声でボブは答えた。
「そんなの見たくないよ・・・」
「ボブ、そうだよね。まずはここのドアを開けてくれるかい」
しばらくして、ドアが静かに開いた。中にいるボブは泣いていた。
「ボブ！」
母親はそう叫んでボブの元に近寄った。そして二人は抱き合った。

「お母さん、ごめんなさい、ワガママを言って・・・」
「いいのよ、お母さんも少し言い過ぎたわ。あなたのやりたいことはちゃんとやれるよう、気をつけていくわ」
二人はしばらく抱き合っていたが、落ち着くと、母親はワガママンの方を振り返ってこう言った。
「ありがとう、ワガママン。あなたのおかげで息子も部屋から出てきてくれたわ」
「いいんですよ、お母さん。これがぼくの仕事です」
そう言って、ワガママンはボブの方を向き、こう言った。
「ボブ、今日は君と話せてよかったよ。
残念ながらずっとは自分の思い通り、自分のワガママばかりでは生きていけないんだ。どこかでガマンをする必要がある。そしてガマンができるかどうかは、何かを守りたいという気持ちなんだ」
そう言うワガママンの胸にあるメーターは大きく左に振れていた。
メーターの左はガマンのメーター。自分の気持ちをうまく抑え込み、他人を思いやったり、ガマンをする時、メーターは左に振れるのだ。
「ありがとう、ワガママン！」
母親とボブはワガママンに笑顔でお礼を言った。
ワガママンも笑顔で二人に手を振り、去っていった。
みんなのヒーロー、ワガママン。彼はワガママとガマンの両面を持った紳士。彼は今日も困った人々を、その二面性をうまく使って、解決していくのであった。

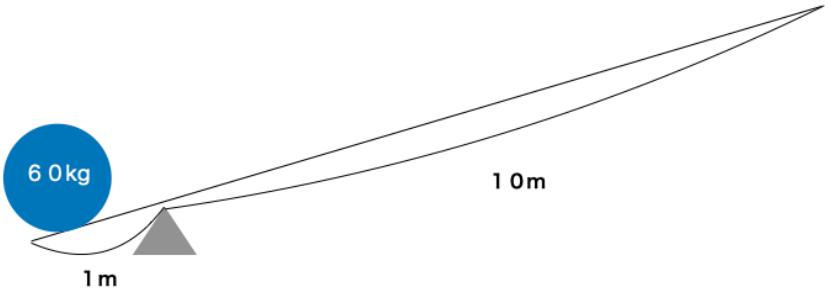
自分の気持ちと相手の気持ち

この本を読んだスイスイは、自分の行いを恥じた。
今日も学校に出かける際、自分の母親にワガママを言ってしまったなと恥じた。
自分は朝食はパンが良かったのに、昨日の残り物のスープしか出てこず、仕事に出かけるのに忙しい母親にかなりきつい言葉で文句を言ってしまった。
帰ったら母親に謝ろう。
そう思って、スイスイは図書館の館長と、司書のゴシカに別れを告げ、家路(いえじ)につくのであった。朝、自分のワガママをガマンできなかったことを謝りに。

第7章　算数：てこの問題

問題

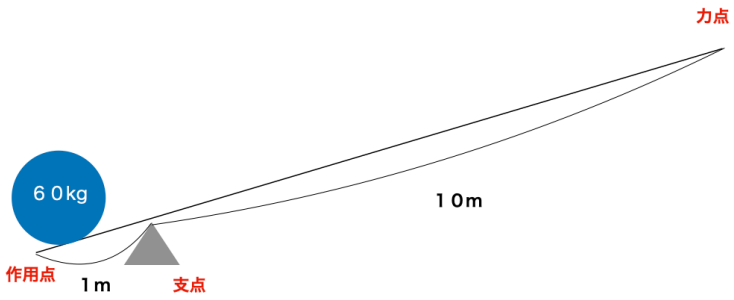
以下のような重い石をてこで持ち上げるとします。



この時、何kgの重さで右側に力を込めれば、持ち上げることができるでしょうか。

腑に落ちないスイスイ

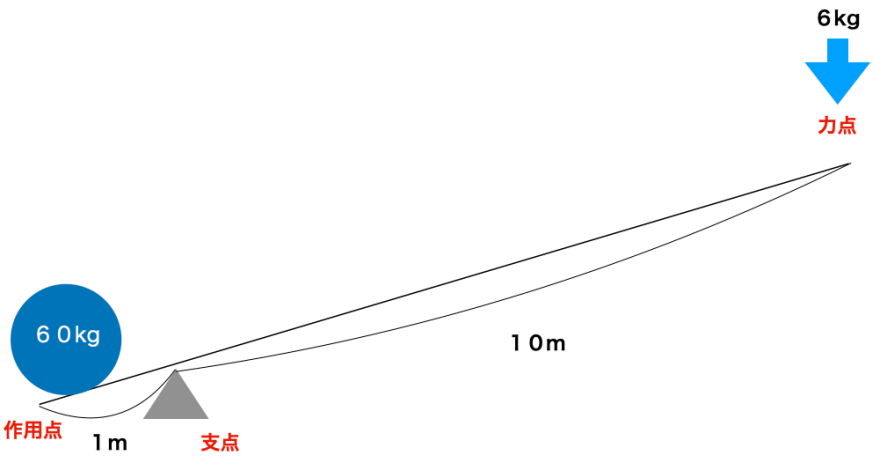
タール村の図書館で借りた算数の問題集の、このてこの問題を見て、スイスイは辟易してしまった。この問題の答えは６ｋｇである。そもそもてこには力点、支点、作用点の三つのポイントがある。先ほどの問題に関してはこうなる。



棒を支える点が支点（してん）、力を込める点が力点（りきてん）、動かす対象の石があるところが作用点（さようてん）である。

そして公式として、支点を境にして、右と左の力が同じになるというものがある。かつそのそれぞれの力は、支点からの距離×重さで導（みちびく）くことができる。

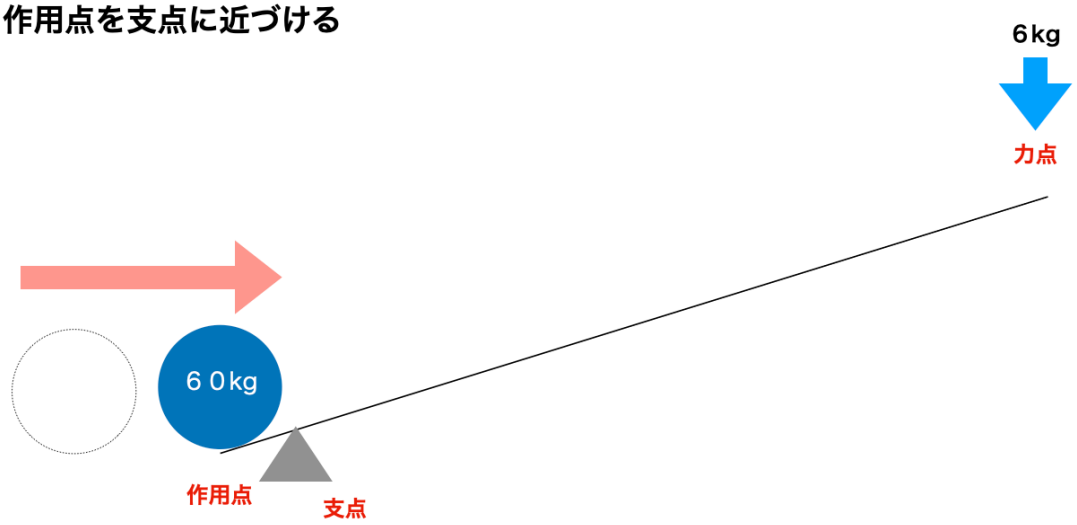
左側で言えば、１ｍ×６０ｋｇ＝６０。
そして右側は１０ｍ×○。右と左の力は同じとなるため、答えは左側と同じく６０。１０ｍ×○＝６０
となり、○に入るのは６ｋｇとなる。



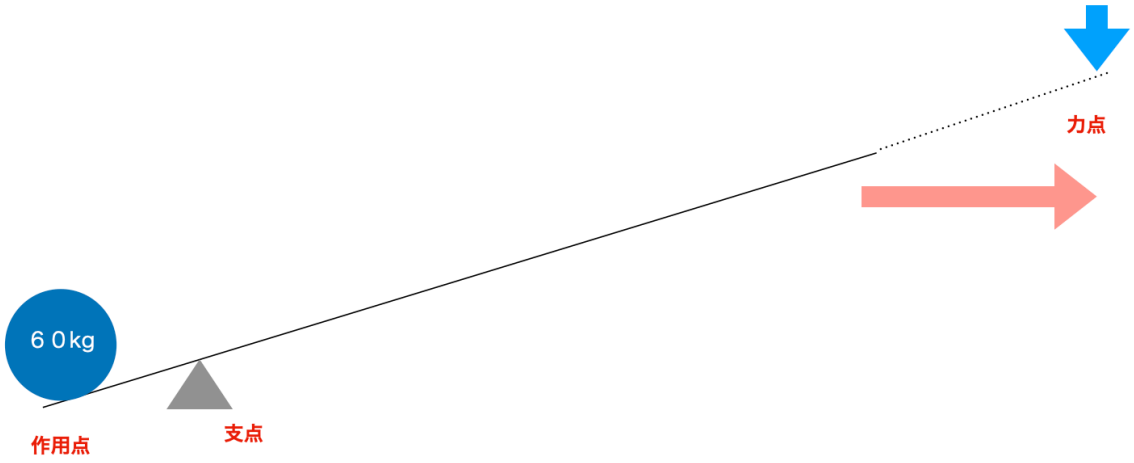
答えは導き出せるのだが、スイスイは何か腑に落ちないものを感じていた。なぜてこを使うと、小さい力で、重いものを持ち上げることができるのだろう。
この公式にはおまけがあって、小さい力で重いものを持ち上げるのには二つの方法がある。

一つ目は作用点を支点に近づけること、もう一つは、力点を支点から遠ざけることだ。

作用点を支点に近づける



力点を支点から遠ざける

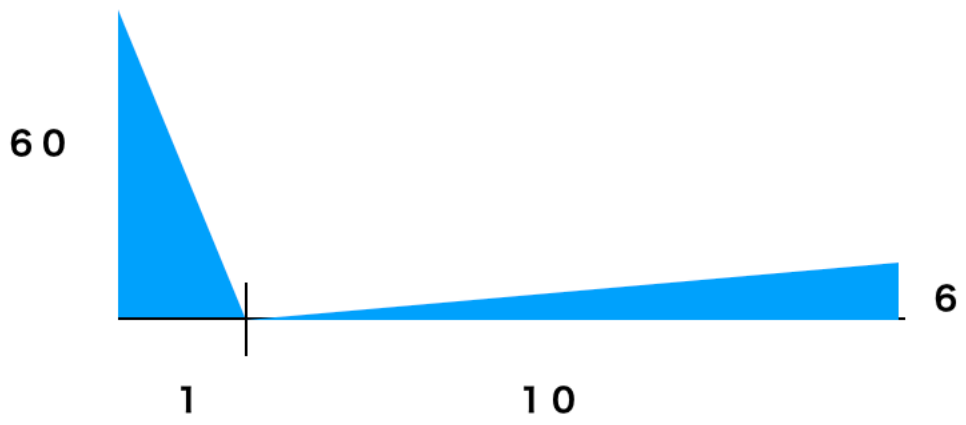


なぜこのようなことが起きるのだろうか。
そもそもなぜ距離を変えたりすることで、発生する力が変わってくるのだろう。
わけがわからないという様子で困っていたスイスイを見て、館長が近づいてきた。

てこは三角形で考える

「スイスイさん、問題が難しくて、お困りのようですね」
そう言って、優しそうに笑って、館長はスイスイに話しかけた。
コクリとうなづき、スイスイは館長に相談した。
「館長、てこの問題なんだけど、私全然わからないの。
てこって本当に不思議。どうして支点からの距離を変えると、込める力が変わるんだろう。
だって重い石は重い石だし、私の力だって、急に変わったりしない。でも距離を変えるとなぜ込める力の量が変わるのか、なんだか腑に落ちないの」
一気にまくしたてたスイスイの後ろから、司書のゴシカも会話に参加してきた。
「あー、なんか私も子どもの時にやったなー、この支点とか作用点とかのやつ。あと滑車の問題ね。今やってもできる気がしないわ」
そういってカラカラとゴシカは笑った。
気を取り直して館長はスイスイに話した。
「スイスイさんは、どうしててこが、作用点や力点の位置を変えるだけで、込める力の量が変わる点に、納得がいっていないという感じですか」

「そう、なんで距離によって力が変わるのかがわからないの」
「であれば、こういうふうに考えてみてはいかがですか」
そう言って、館長は図を描いた。



「先ほどの問題だと、左、作用点の方ですね、それが６０ｋｇの石で、支点から１ｍ。そして右が支点から力点までで１０ｍ、そして込める力が６ｋｇでした。
仮に力を縦軸、支点からの距離を横軸とした時、このような三角形が出来上がります。
さてスイスイさん、この時左の三角形の面積はなんですか」
質問されたスイスイはすぐに答えた。
「６０×１÷２で、３０です」
「正解です、では右は？」
「こっちは６×１０÷２で、こっちも３０です」
「そうなんです、公式で、支点を境にして右と左にかかる力は等しくなるというのがありますが、重さという目には見えないものを算数では縦軸として見ると、三角形の計算と似ていますので、イメージがつきやすいと思います」
ゴシカも感心して言った。

「なるほどね～、確かに面積が変わらないのであれば、力点から支点までの距離を伸ばせば伸ばすほど、力点で必要な重さは減るわね」
「どういうこと、ゴシカさん」
少し話についていけていなそうなスイスイはゴシカに質問した。
「あ、ごめんごめん、つまりね、力点から支点までの距離を仮に１０ｍから２０ｍにするじゃない？
でも面積が変わらず３０だったとする。式で言えば、２０×○÷２＝３０で、○に入るのは６０÷２０で３になるわ。
つまり距離を２０ｍに伸ばせば、６ｋｇからさらに３ｋｇで力が済むことになるのよ」
「すごい、さらに力がいらなくなるんだ」
「そうね、あとは作用点を支点に近づけるってことだけど。
左側が６０ｋｇの石に支点からの距離が１ｍなのよね。この時の力は１ｍ×６０ｋｇで６０だわね。
でも支点から作用点までの距離を短くしてみる。例えば０.５ｍ。そうすると、０.５×６０ｋｇで、３０になるわ。
こうなると、右側は１０ｍ×○＝３０になるので、○は３。つまり３ｋｇで持ち上げられることになったわ！」
ゴシカは少し興奮気味にスイスイに話した。スイスイも話を理解したようだ。
「なるほどね～、重さを縦の長さみたいに考えて、面積のように見ると、わかりやすいね」
館長はうなづいた。

「そうですね、スイスイさん。今回は三角形で面積を考えましたが、三角形だと÷2をいちいちしなくてはいけないので、ちょっと面倒ですね。まあ結局左辺も右辺も÷2をするのですから、いちいち÷2をする必要はありません。今回はイメージを掴(つかむ)むためにやりましたけどもね」
館長は満足そうにもう一度うなづいた。
「でもこうなると、本当にてこは便利よね。距離を伸ばせば伸ばすほど大きな力が出るなんて。なんか無敵みたい」
ゴシカが言った発言が、スイスイも気になっていた。なんだかてこは無敵のような感じがするのだ。欠点がない最強の手段。でもそんなことが本当にあるのだろうか。
「いい着眼点だと思いますよ、ゴシカさん。そう、実はてこは万能ではない、ある重大な弱点があるのです」
「えっ、それってなんなの！」
それが聞きたかったという様子で、食い入るようにスイスイが質問してきた。
館長はうなづき、こう発言した。
「それはものすごい長い距離が必要ということです」

てこの弱点

「距離、、、確かに込める力を減らすには、力点を支点から遠ざける必要があったわね」
ゴシカは独り言のように呟いた。

「そうなんです、てこは込める力を減らしたかったら、それと反比例して支点からの距離が伸びるのです。
こんな例で考えてみましょう。重たい荷馬車（にばしゃ）、そうですね、思い切って１０００ｋｇあるとしましょう。まあ１トンですね。これの滑車のところにものが挟まってしまい、それを取るために荷馬車をぐいっと持ち上げなければならないですと。その時にてこを使うことになりました。
荷馬車は１０００ｋｇ、ここが作用点ですね。そして作用点から支点までの距離は１ｍ。てこの反対側に人がぐいと持ち上げる。その人が込められる力が体重と同じ５０ｋｇとしましょう。
さて、スイスイさん。この時支点からその人までの距離、つまり力点までの距離なのですが、何ｍ必要だと思いますか」
聞かれたスイスイは暗算で答えた。
「つまり荷馬車の方が１ｍ×１０００ｋｇで１０００だよね。
で人の方が○ｍ×５０で、これが同じく１０００になるんだから、１０００÷５０で２０。
えっ、２０ｍも必要なの！」
驚いた様子でスイスイは言った。
「そうなんです、１トンのものを持ち上げることができますが、それには２０ｍも離れたところから力を込めなければならないんです。ちょっと面倒というか、そんな棒を用意できるかもわかりませんし、ちょっと非現実的ですよね」
ゴシカも発言した。
「うーん、そうねえ、ちょっと長すぎるわね。結局、何かを得るためには、何かを捨てなきゃいけないのかしらね」

メリットとデメリットは表裏一体

館長は、人差し指を立て、「その通り」と言いたげに、ゴシカとスイスイに話した。
「私が最も伝えたかった点はそこです。力を使わなくて良いというメリットを享受すると、その代わりに距離を稼がなくてはいけないというデメリットが発生するということなんです。
この世には万能のツールなんて存在しないのだと思います。その時と場合に応じ、面積のような有限のリソースをうまく縦軸と横軸の長さを変えて対応して行く。そういったことが重要だと思うのです」
スイスイは加えてこう言った。
「なんか頑張る時と似ている。例えば頑張って勉強をすると、確かにテストの点数は良くなるかもしれないけど、すっごく疲れちゃうの。ずうっと頑張るなんてできないと思う。
何かを頑張れば、その分どこかで休まなきゃいけない。そういうことなのかなあ」
そう言ったスイスイにゴシカは答えた。
「そうね、スイスイちゃん。ずっと頑張るなんて無理だよね。やれる量は変わらないんだから、どこかで頑張ったら、どこかで同じくらい休まないとね」
館長もそれについて同意だった。
とかく、最近は頑張ることが奨励され、休むことが忌み嫌われる傾向がある。しかし頑張ることと休むことは表裏一体。てこの重さと距離と同じだ。計算の結果得られるものが同じであれば、どちらかを増やせば、どちらかを減らす必要がある。増やし続けることはできないし、減らし続けることもできない。

館長は今週のおすすめコーナーに、この算数の本を置いた。ちょうど学校も夏休みで子どもたちも暇だろう。算数の問題なんて嫌だろうが、館長はてこの問題を含んだこの問題集を、おすすめしたい気持ちを止められなかった。

第8章　夢のかなえ方

絵本「夢のかなえ方」

あるところに、男がいた。
彼には仕事があり、家族がいた。
昼は懸命(けんめい)に働き、夜帰ってから家のことをやり、休日が取れた日には家族と幸せに暮らしていた。
しかし彼には野望があった。外の国に行き、色々な場所を巡(めぐ)り、冒険をしたかったのだ。
ただ、その野望を達成するためには、今の仕事を辞め、家族を置いていく必要がある。
一家の大黒柱(だいこくばしら)として、到底そんなことはできなかった。彼は幸せで平和な毎日を暮らしつつも、何か満たされないものを感じていた。
だが、彼はあきらめなかった。冒険に出るための準備を怠らず、その機会をずっと待っていた。何年も何十年も、彼の心には外の国に行って、冒険するイメージが、ありありと脳に焼きついていた。
そして仕事の関係で、しばらく外の国に行けるようになった。彼は準備を怠っていなかったため、すぐにその仕事に取り掛かることができ、夢を達成することができた。
その後、彼に人は尋(たず)ねた。どうやって夢を達成したのですか、と。
彼は答えた。
「簡単だけど、一番難しいことをやったまでです。
　それはあきらめないことです」
おわり

あきらめたくなる気持ち

司書のゴシカは、本を整理している中、この絵本、「夢のかなえ方」に目が止まり、パラパラと読んでしまった。

実はゴシカには夢があった。それは自分で絵本を書いて、世に出すことであった。

ゴシカは文章を書くのは得意であった。子ども向けに平易（へいい）な文章を書くこともできた。それは自分が子どもを産み、育ててきたからであろう。

しかし、からっきし絵が上手ではなかった。どうしてもちんちくりんな絵になってしまう。それはそれで味があるのだが、ゴシカ自身としては気に食わず、こっそりと絵の勉強をしていた。

絵本を書きたいと思ったのは三十歳頃のことで、もうそろそろゴシカは四十歳になろうとしていた。

そろそろ五年ほど絵を勉強しているが、さすがに最初の頃から比べたら自分の腕は上達したと思うが、この図書館で働いていると、すばらしい絵を描く作家が山ほどいる。そんな中、仕事をしながら片手間（かたてま）で絵を勉強している自分が敵うはずないと、自信をなくしてしまうのであった。

それでも絵本を書きたいという夢はあきらめず、仕事が終わり、育児家事の合間を縫って、絵の勉強に励むのであった。

そんな中、夢のかなえ方という本があって、つい読んでしまった。つまりそれは自分が夢をかなえたいと思っていることに他ならない。

この本では、あきらめずずっと準備をし、待っていればいつかチャンスが巡ってくるという主旨で書かれていた。

しかしそれにはどうも自分自身、納得がいかなかった。本当に自分はこのままで夢をかなえることができるのか。かなえるためには別の方法を取った方がいいんではないのか。そんな悶々とした気持ちで、しばらく仕事をしていた。
その時、館長がゴシカに声をかけた。
「ゴシカさん、どうかしました。いつもの元気がないようですが」
館長とはここで働いて三年ほどになる。館長の優しい人柄が好きで、かなり打ち解けた仲であった。
「館長、、、なんかこの本をチラッと読んだら、なんだか元気がなくなってしまって」
ゴシカはそう言って、さっき読んでいた「夢のかなえ方」の絵本を館長に渡した。
「ほう、すばらしいタイトルですね、夢のかなえ方ですか」
そう言って、ざっと館長は絵本に目を通した。それからゴシカに言った。
「確かにあきらめなければ夢はかなう。これは結構巷では言われることですね。
ただ、うがった大人が見ると、本当にそれで夢がかなったら苦労しないよ、と思いそうですね」
「そうなのよ、館長。私もそう思っていて、夢が努力でかなうんだったら苦労しないわ、と思ってしまうわ」
ゴシカは正直に館長に話した。館長は言った。
「私の夢は図書館で働くことだったので、一応夢はかなえたんですよね。でもよくよく考えてみると、私の夢は実は違うことだったんだなって気づきました」
「それってどういうこと？」
ゴシカは身を乗り出して館長に尋ねた。館長はゆっくりとした口調で話し始めた。

「私は最初、違う仕事をしていて、ちょっとそこで病んでしまって、図書館で働き始めたんです。その理由は本が好きだったから。そしてなんやかんや仕事をしていたら、いつの間にか館長になってしました。

でも館長になると、こんなことゴシカさんの前でいう話じゃないかもしれませんが、管理業務だったり、事務手続きだったり、責任を感じたりで、嫌な面も見えてきたんですよね。だから、正直、もう館長の仕事を辞めようかと思ったこともあります」

あまり聞いたことのない話だったので、ゴシカは驚いた。いつも柔和な感じで接してくれる館長にも、さまざまな悩みを抱えていたのだ。

「そうこうしているうちに、考えたんですよね、どうして自分は本が好きなんだろうと。色々と考えてみたのすが、見識が広がるとか、自分の世界に閉じこもることができるとか、そう言った理由が挙がってきました。また、図書館のこの静寂（せいじゃく）の雰囲気が好きだとも。

しかしゴシカさんもご存知のように、図書館で働くというのは、一種の接客業の側面もありますから、どうしてもコミュニケーションは避けられません。たまには来館される方とトラブルになることもありますしね。

どうしても、好きな本に囲まれて仕事ができているという事実を忘れ、嫌なことばかり見えてしまうのです」

確かにそうだ、とゴシカは思った。不思議なもので、良いこと、ありがたいことはすぐに忘れてしまって、嫌なことばかり見えてくる。

ゴシカには子どもがいたが、彼らが健康で楽しそうにしているので本当は満足なはずなのに、もっと勉強させなければいけないのでは、とか、もっとしつけを厳しくした方がいいのではないかと気になってしまう。その時、彼らの存在のありがたさは消えてしまっていた。

膨れ上がる欲

「ニンゲンって、本当に欲張りな生き物なんだね」
振り向くと、学校帰りのスイスイがそばにいた。どうやら館長とゴシカの話をずっと聞いていたらしい。
「あれもやりたい、これもやりたいって思っちゃうのかな。お腹みたいに、お腹パンパンになったら、もう食べれない～てなればいいのにね」
そう言ったスイスイに、館長は話した。
「確かにそうですね、スイスイさんの言うとおり、欲もお腹みたいに、上限が決まっているといいのですが。
悲しいことに、それはないようです。それがないのが欲の一番厄介なところです」
「でも欲があるから、人間は行動できるのよね」
ゴシカはポツリと言った。そう、自分に絵本作家になりたいという夢がなければ、図書館で働き、子どもたちを育てるだけで人生を終えるのだろう。
しかしゴシカには夢があった。それを持つことにより、辛い人生になるかもしれないが、得られるものはかけがえのないものになるはずだ。

「館長、今週のおすすめコーナー、この本にしていい？」
そう聞かれた館長は、少し驚いた様子であったが、優しく答えた。
「もちろんです」

夢があるから動ける

ゴシカは今週のおすすめコーナーに、「夢のかなえ方」を置いた。
そこに付箋をつけておいた。そこにはこう書かれていた。
「夢、あきらめそうになりますよね。私にも夢がありますが、なかなかかなっていません。でも続けていこうと思っています。めげそうになりますけど、この夢があるから、頑張ろうって思っている気がします。一緒にがんばりましょう◯」　司書ゴシカ

第9章　幸せのありか

絵本「幸せのありか」

その男は生まれた時から奴隷(どれい)であった。
来る日も来る日も重労働をし、貧しい食糧(しょくりょう)だけで飢えを凌(しの)がないといけなかった。
しかし時代が変わり、奴隷制度は廃止されることとなり、男は自由の身となった。
解放される際、一定の金が支払われた。そして一年間は自由にして良いという自由権を与えられた。
男は奴隷から解放され自由になった瞬間、狂ったように遊びに呆(ほう)けた。
まず食べたいものを好きなだけ食べてみた。おいしい。なんておいしいんだ。男は涙を流しながら食べ物を漁った。
その次に旅に出てみた。生まれてこの方、生まれた場所からほとんど移動していなかったので、いろんな場所に旅に出たかった。色々な場所を見て大いに見識が広まった。
また、異性と話したことがなかったので、町に出かけて色々な女性に話しかけた。中には気の合う女性もいて、付き合うこととなったこともあった。男は気の合う女性と出会えて幸せだった。
しかしやりたいことをやっても、その欲は尽きることを知らなかった。もっとおいしいものを食べたいと思うし、もっと色々な場所に出かけてみたい。もっと大勢の女性と話してみたい。そうこうしているうちに、一年間はあっという間に過ぎてしまった。
そこからは前のような奴隷ではなかったが、良識(りょうしき)的な範囲で働く仕事が与えられ、その仕事をするようになった。

ちょうど同じ職場で、奴隷時代に一緒に働かされていたスミノフという男と再会した。
そしてこの自由な一年間、どのように過ごしたか聞いてみた。スミノフは言った。
「俺はある女性と出会って、結婚したんだ。先月ちょうど子どもが生まれたんだ。かわいいよ。俺は彼らと一緒に生活するために生まれてきたんだ」
そう言って、スミノフは満足げな笑みを浮かべた。
またもう一人その職場には奴隷時代に一緒に働かされていた男が配属となった。名前はキエと言った。
キエはこの一年間のことを振り返って言った。
「俺はスミノフみたいにカミさんをもらったわけじゃない。俺は自分が本当は何をしたいのか、それをずっと考えていたんだ。ほら、俺たちって、ずっと奴隷として働いてきたわけじゃないか。つまり自分の意思で選んだ仕事じゃないことをやっていたわけだ。
だから自由になってみて、初めて考えたんだ。俺は一体なにをしている時が幸せなんだろうって。で、たどり着いたのがこれさ」
そう言ってキエは木で掘られた仏像のようなものを取り出した。
「なぜかこれを掘っている時、本当に幸せな気持ちになるんだ。なんだか世界が俺一人だけになって静かな空間になる。何かやらなくちゃいけないことを忘れ、没頭(ぼっとう)できる。別にこれで食っていけるわけじゃないが、幸せなんだよな」
キエもスミノフと同じように笑った。

男は二人がうらやましかった。自分はただ欲望に任せ、やりたいことを好きなだけやっていた。というより、そういうことで時間を使った人間の方がはるかに多かった。スミノフやキエのようなパターンは稀であった。
自分もスミノフのように家族を持てば幸せになるのだろうか。
それともキエのように好きなことを見つければ幸せになれるのだろうか。
悶々と考えながら、今日も男は職場に向かうのであった。

埋めようとする修正能力

なんとも言えないラストに悶々(もんもん)としながら、スイスイはその本を閉じた。
題名は「幸せのありか」。奴隷から解放された男が、幸せとはなにかを求めて、悩む話であった。
浮かない顔をしているところに、館長とゴシカがやってきた。
「あら～、また浮かない顔をしているわね、スイスイちゃん。その本、微妙だったの？」
ニヤニヤしながらゴシカが言った。コクリとスイスイはうなづいた。館長は言った。
「幸せのありか、ですか。これまた意味深な本ですね。
　そう言った類の話で有名なのは『青い鳥』ですね」
スイスイもその話は知っていた。確か二人の兄弟が青い鳥を探して旅に出る話だ。途中のストーリは忘れてしまったが、幸せの青い鳥は実は家にいたというラストだったと思う。
「あれって、幸せを外に求めるんじゃなくて、実は近くにあるよってことを言いたいお話だよね」
スイスイの言葉に館長はうなづいた。

「そうですね、兄弟は色々と探し回るのですが、結局家に帰ったらその青い鳥はいた。幸せは身近にあるということを隠喩的に表現したかったのでしょう」
その言葉にゴシカは少し反論した。
「いやでもねえ、言いたいことはわかるけど、ちょっと理想論すぎない？って私は思っちゃうわ。一番身近な存在、例えば家族でも、確かに家族と一緒にいれたら一番の幸せに間違いないけど、色々欲が出てくるのが人間じゃないの？おいしいものを食べたいとか、もっとぐうたらしたいとか。身近なものだけで我慢しろというのは、ちょっと現実に合っていない気がするわ」
ゴシカの話ももっともだと思った。スイスイだって、お父さんやお母さんたちや友達と過ごせることは幸せなことだという自覚はあるが、もっとこうしたい、こうなりたいという願望は常日頃ある。この欲との付き合い方が難しいなとスイスイは感じた。
その様子を気付いていたかわからないが、館長が欲について話し始めた。
「欲という字は、谷が欠けると書きますよね。地面から見れば、谷は欠けている箇所です。私たちは知らず知らずのうちに、欠けているものも見つけ、それを埋めようとする修復機能があるんだと思います」
「つまり、治癒能力みたいなことかしら？」
ゴシカの指摘に館長はうなづいた。
「そうです、人間はさらに自分を生存確率の高い場所にいざなおうとする本能があります。これは無意識の行動です。
だから暇な状態が発生すると、その隙間を何かで埋めようとするのです。欠けた谷を何かで埋めようとするみたいに」

スイスイの頭の中では大きな崖みたいなのがあって、地面に対して亀裂(きれつ)が入っている。そこに土のようなものを流し込み、まっさらな平地にするようなイメージを、その言葉から想起(そうき)した。

「隙間(すきま)があったら埋めたいと思うかあ。確かになんとなくわかる気がするわね。私もなんだか暇ができちゃうとなんかソワソワしてしまうというか。ゆっくりしていればいいのに、ちょっとお掃除なんかしちゃったりして」

ゴシカは毎日の出来事を振り返って言った。館長は言った。

「これは私の持論ですが、もっと隙間を隙間のままにしておくというか、暇の時間を何もしないとかそういったことに我々は慣れなければいけないと思うんです。

ここ最近は暇の時間があれば"スキマ時間"と称し、それを有効的、効率的に使おうなんて言ったりします。しかしそれは必要な暇なんです。それがあるから日々の生活に緩急が出たりします。ずっと頑張ったりすることは不可能なんです」

スイスイは最初の方であった、幸せの青い鳥の話を思い出していた。

兄弟は時間があったので、青い鳥を探しに行くことができた。確か、病気の人を治すために青い鳥が必要というようなストーリだったと思うので、多少の義務感はそこに発生していたと思う。

そしてその時間を使ってあるゆることを試してみた。しかし何を埋めても、何も見つからなかった。

そうして家に帰ってみる。そこには青い鳥がいた。幸せと青い鳥にはどのような関係があるのだろう。

コアな部分はすでに満たされている

ゴシカは言った。

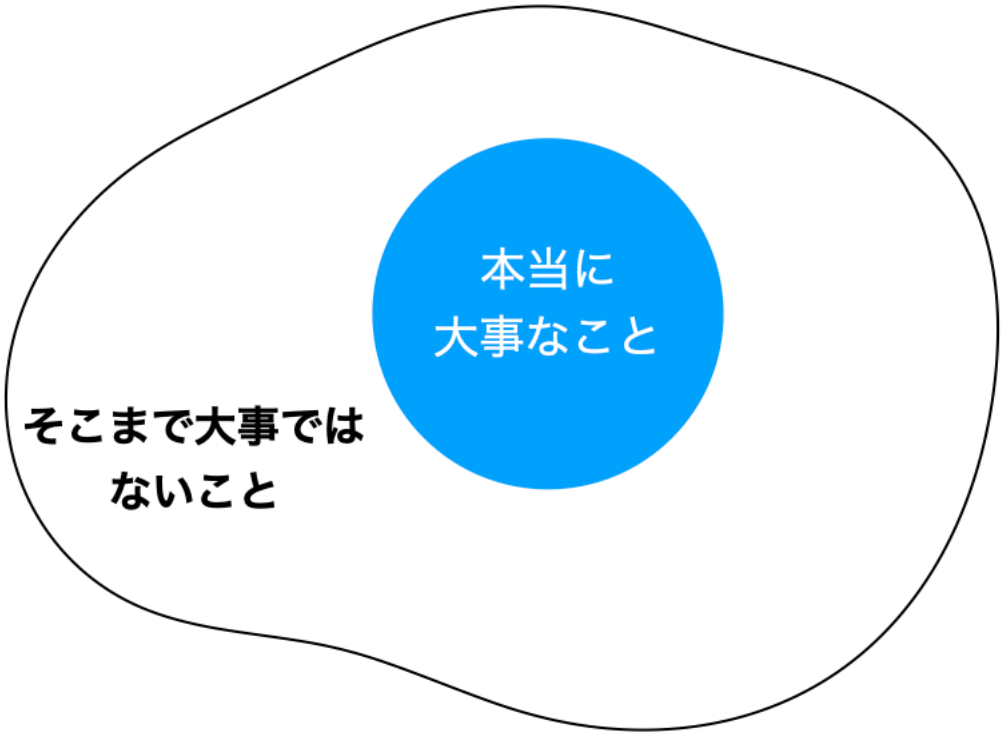
「さっきの青い鳥でいうと、今の"暇"の話はなにか繋がるのかしら。あんまり暇っていうのと結びつかない感じだけど」

ゴシカはスイスイと同じような感想を抱いている様子だった。

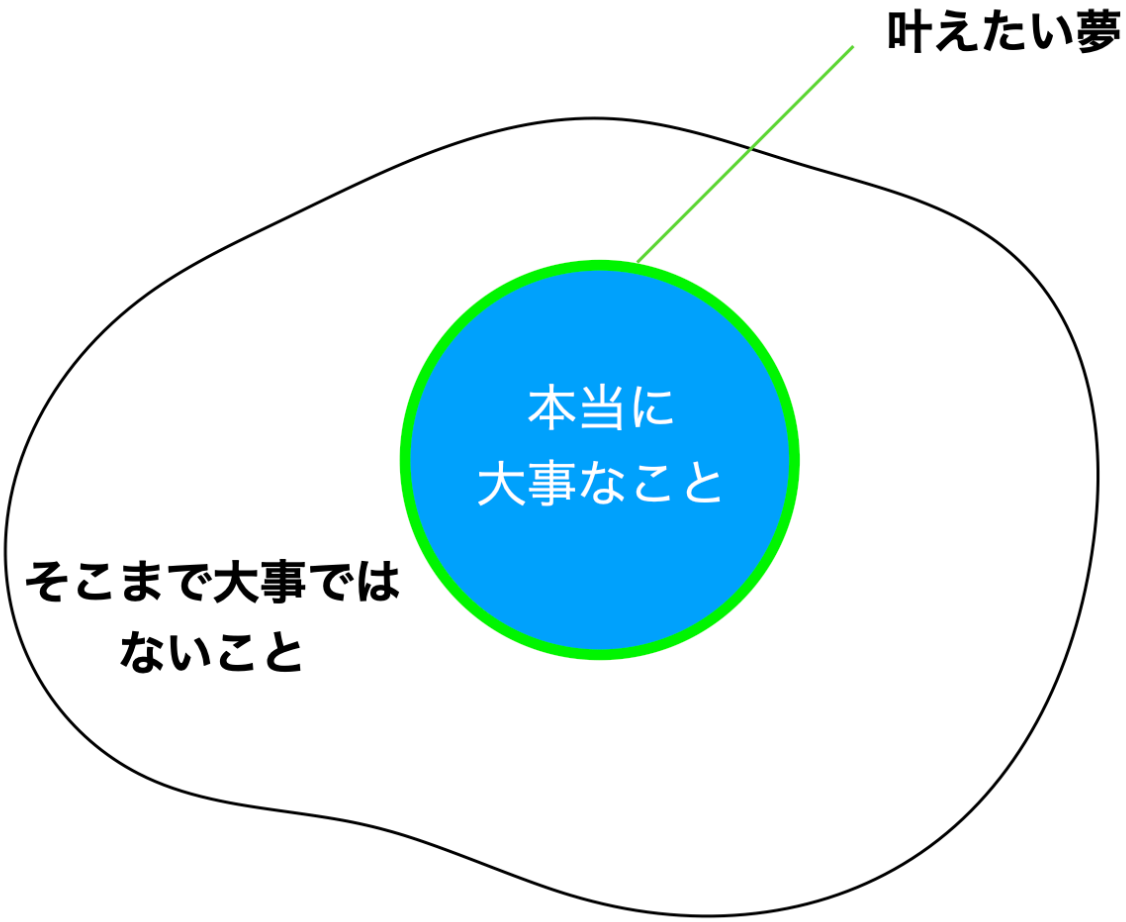
館長は言った。

「私が思うに、谷があってそこを埋めたとしても、コアな部分はもう満たされているということなんじゃないでしょうか。コアな部分とは毎日平和で、お腹をすかせることなく生きれていることとか、家族が無事であることとか。だから多少の谷があってそこを埋めたとしてもあんまり意味はなくて、もうコアな部分は満たされているので、大丈夫だよと言いたいのではないでしょうか」

そう言って、館長は丸を書いて、そこに重要なこと。そしてその周りにふわふわとした線を描き、そこと囲まれた箇所は、そこまで大事ではないことと書いた。


本当に
大事なこと
そこまで大事では
ないこと

しかしあまり納得した顔ではないゴシカは言った。
「確かに館長の言うとおり、大事なことはすでに満たされていて、後のことは本当はどうでもいいことなんじゃないかって言うのは、一理あると思うわ。
でも、、、ちょっとみんなに言ったかどうかわからないけど、私、実は絵本作家になる夢があるの。この年だけど、やっぱりなりたくてね。そう言うのは空腹を満たすとか、家族と幸せになるとかそういったことじゃないから、ここでいう"本当に大事なこと"ではないと思うの。
でも私にとってこの夢はどうでもいいこと時なんじゃなくて、どうしても叶えたい夢なの。それも、そんなに大事ではない、欠けた部分ってことなのかしら」
少し興奮気味に言ったゴシカに対し、館長は静かに言った。
「いいえ、どうでもいいことなんかじゃありません。ゴシカさんの夢は素晴らしいことです。
そしてその夢を話してくれてありがとうございます。本当に素晴らしい夢だと思いますよ。
それはここに属すると思うのです」
そう言って館長は先ほどの図に、「叶(かなえ)たい夢」と書いて、本当に大事なことの丸を囲った。


叶えたい夢
本当に
大事なこと
そこまで大事では
ないこと

苦しいが、夢があるから動ける

「本当に大事なことは、生きるのに直結すること、食べれていることや健康でいられていること、家族と過ごせていることなどが当てはまるのでしょう。しかし今の社会ではありがたいことにそれが満たされています。ですから私たち人間は他のこと、欠けていると思われることに気を取られ、暇を埋めています。それが先ほどの図で言う、”そこまで大事ではないこと”ですね。

しかしそれだけだと食べても食べても満腹にならないのと一緒。いつまでも満たされません。しかし注意深く観察していると、実は自分が好きなことが見つかります。それをやっているときはひどく幸せになれることが。そしてそれを積み重ね長期間やっていると、何かしら”これをやりたい”というかなり強い欲望が生まれます。これが夢の始まりです。これは確かになくても生きることができますが、夢があると生活に張り合いが出ます。

確かにその張り合いのせいで疲れてしまうこともありますが、これは原動力のようなものなのです。本当に大事なことではありませんが、それを守る卵の殻のように、自分を守ってくれるものなのです」

まだおぼろげではあったが、館長の言いたいことは、二人にもなんとなく伝わった。

「結局、本当にやりたいことがあったら、続けなさいって、ことなのかしらね」

最後にゴシカがまとめて、この話は終わった。

次の日から、この本「幸せのありか」は、今週のおすすめコーナーに置かれることになった。

それを見たスイスイは、自分の本当にやりたいことはなんだろうと反芻した。それを見つけるのが、スイスイにとっての当面の課題となった。

第１０章　かみさまからの贈り物

絵本「かみさまからの贈り物」

あるとき神は二人の男を創造した。
その二人は何もかも一緒であった。顔も背丈も能力も同じであった。
一人目の男はムアといい、もう一人はブイと言った。
ムアは大人になっても特に何をすることなく、言われただけの仕事をして、退屈をしながら生きていた。
特に家庭を持たず、仕事をする以外の日の大半は家で酒を飲んでいた。
そして徐々に年老いていった。死ぬ時には残念ながら誰にも看取られることなく、一人でこの世を去った。
ブイはとりあえず几帳面な性格で、何をするにも時間を測っていた。
この作業には何分、何時間と自分の中で統計を取り、一日の二十四時間を有意義に使った。
彼には建築家になりたいという夢があったので、勉強に精を出した。建築の仕事に就いた後も、自分の生活をうまくコントロールし、次々と夢を叶えていった。
それを見ていた、二人を創造した神は不思議に思った。二人とも能力は同じくらいにしておいた。
しかし片一方は飲んだくれ、もう片方は成功し周りにもいい影響を与えている。この違いはなんなのだろうか。

そう考えていると、南の神がやってきた。この世界では北の神と南の神の二人で統治しており、不思議に思っていた北の神のところに、南の神がちょうどやってきたところであった。
南の神が言った。
「この二人ではあるものの使い方に、明確な違いがあるようじゃ」
「その違いとは一体なんだ」
北の神は聞いた。南の神はゆっくりと口を開いた。
「それは私たち神もそうじゃし、もちろん人間もそうじゃ。それは皆に平等に配られる」
北の神は首を捻って聞いた。
「それはなんじゃ、南の神よ。私はあの二人の男に同じ体を与えた。それ以外に皆にも共通する、何か平等なものがあるのか」
南の神は言った。
「それは目には見えない。しかし誰にも平等に分け与えられている。そしてそれは食糧や金のように貯めることはできない」
「だからそれはなんじゃというんだ」
北の神は痺れを切らして言った。しかしとうとう南の神は答えは言わず、去っていった。
北の神は答えがわからず悶々とした日を過ごした。そして何年、何百年と過ぎてしまった。もちろんムアとブイはもうこの世を去っていた。
しかしムアとブイには子孫がいて、その子孫たちがまだ生き残っていた。
長い年月が経っていた。そしてその瞬間、北の神は悟った。南の神が言っていたものがなんだったのかと。

平等とはなにか

その日いつも通り朝の早い時刻に、館長は図書館につき、門を開いた。
まだ司書のゴシカは来ていない。朝この静かな時間を独り占めできるのは、館長の毎日の密かな楽しみであった。
そして本の整理を淡々と行う。その時、この本が返却ボックスに置かれていた。
そのタイトルは「かみさまからの贈り物」。一人の神が能力が同じ人間を創造するが片っ方の人間は堕落するのに対し、もう一人はきっちりとした生活を送り自分の夢も叶えていく。もう一人の神から、神も含め人間たちにもあるものが平等に分け与えられているという。最初の神はその答えがわからないのだが、時間の経過とともにその答えがわかる。
答えは「時間」である。時間は二十四時間で、だれしもそれは同じである。お金持ちも貧乏人も同じ二十四時間を保有している。
常々、館長はこの限られた時間をどう使うかで、人の人生が大きく変わっていくことに気づいていた。
同じ二十四時間でもだらだらと過ごす日々を送っている人と、何か目標を持ってコツコツ継続している人を見比べると、一年後には大きな差がついていることがある。それほどこの時間の使い方というのは大事なのである。
そして今、館長は自分だけの時間を優雅に使っている。どう時間を使うかはその人の自由だ。しかしその使い方で人生が大きく変わってくる。
自分の時間を大事に使おう。そして何に投資するかをちゃんと考えよう。
そう思って、館長は、かみさまからの贈り物の本を、今週のおすすめコーナーにおいた。

押し付けとおせっかい

この世界にはさまざまな本があり、自分の世界を広げてくれるものばかりだ。安易なものばかりに食い付かず、自分の可能性を高めてくれる良書と出会おう。自分の押し付けからもしれないが、長いこと館長は今週のおすすめコーナーに、推薦する本をおいてきた。

これからも館長のおすすめは続くであろう。強く押し付けることはしない。しかし多くの本を知っている館長にとって、それを知らない人への何か気付き、発見につながるかもしれない。

おせっかいかもしれない。嫌がられるかもしれない。しかし他者へのアプローチなしに成長はない。

その距離感を考えつつ、館長は自分の考えを発信していくつもりであった。

さあ、そろそろゴシカが来てくれる時間だ。もしかすると学校の友達を連れてスイスイもやってくるかもしれない。

館長は今の自分の境遇に感謝しつつ、自分にとって正しいと思うことを、押し付けにならないよう気をつけながら、今週のおすすめコーナーという形を持って、世に発信していくのであった。

第三部　完

第四部へ続く。